

作者の序文

私は自分の「手記」のなかに、シュヴァリエ・デ・グリユーの恋愛悲話を挿入することにしたのであるが、その間には必然的な関係は少しもないので、読者はそれを切りはなして読むほうがいっそう満足されるのではないかと思う。これだけ長い物語になると、そうでもしなければ、私の本来の話の筋をあまりに永いあいだ中断することになるであろう。私には行き届いた作家の資格を求める気持は毛頭ないが、説話というものは、それを鬱陶しくしたり煩雑にしたりするような、さまざまの副事件をふりすてていなければならぬことを、私も知らないではない。それはホラーチウスの次の掟にも明らかである。曰く、

即ち今直ちに言うべきものを直ちに叙べ、

しかも大部分はこれを差し控え、かつ差し当り省略するにあり。

Vertical line on the left side of the page.



てすれば、衆人を楽しませながら教育するということは、彼らに対するなみなみならぬ奉仕なのである。

7

そもそも我々は、道德の掟について考察する場合、それが尊重されているとまったく同時に無視されているのを見て驚かずにはいられぬのである。そうして我々は、実践にあたっては善と全きものから遠ざかるのに、思想においてそれらを味ついているところの、あの不可思議な人間の心の性質について、その理由を問うのである。もしある程度の叡智と訓練とをそなえた人々が、彼らが人と話を交えるときの、またもしくは独りで夢想に耽つているときの、最も共通な題目はなんであるかを考えてみるなら、それらはほとんど常になんらかの倫理的省察に向けられていることに、容易に気がつくであろう。彼らの生活の最も楽しい時間は、彼らがひとりでもしくは友人を相手に、心の扉を開いて、美德のもつ魅力や、友情の好ましさを、幸福に到るための手段や、我々をその目的から遠ざけようとする自然的な意志の弱さや、その意志の弱さを救うべき方法などについて、たがいに語りあうときである。ホラーチウスやボワローは、このような会話を、彼らが幸福な人生の姿を描く時の最も美しい線の一つとして指摘している。だがそういう対話のあとで、どうして人々はあるに容易に、そのような高い思弁から転落し、またあれほど急速に凡人の水準にまで帰ってしまうようになるのであろうか。もし私がこ

純な真理を証明するために、このような激しい権威を持ち出すほどの必要はないのである。なぜなら良識がこの規則の第一の根源なのであるから。

もし世間が私の生涯の物語のなかに、なにか愉快なもの、興味ぶかいものを見出すとしたら、この附録にもそれに劣らず満足するであろうことを私はあえて彼らに約束する。人はデ・グリユー氏の行状のなかに、情火の力の戦慄すべき実例を見るであろう。私は福であることを拒む。最も優秀な人物になれる才質はことごとく身に備えているにも拘らず、彼は運命と自然のもたらすすべての利益よりは、むしろ求めて暗黒と漂浪の生活をえらぶ。彼は自己の災厄を予知しながら、それを避けようとはしない。自己の不幸を感じ、それに悩み疲れながら、人が絶えず彼に申し出る救助を、もし彼にそれを用いる気があるなら、彼の災厄は直ちに終るはずなのに、彼はそれを用いようとはしない。これを要するに、矛盾した性格を、美德と悪徳との混淆を、善き感情と悪しき行為との絶えざる対照を、私は描かなければならないのである。以上の如きものが私の描こうとする絵画の基調である。良識のある人々は、このような性質の作品を決して無用の労作とは考えないであろう。楽しく読めるといふ悦びのほかに、人々はそのなかに、品性の陶冶に役立たぬような出来ごとを見出すことはほとんどあるまい。そうして、卑見をもつ

てすれば、衆人を楽しませながら教育すると、うことは、彼らに対するな

境遇によるものである。してみれば美德の実践において多くの人々に規則の役目をつとめうるものは、実例のほかにはないということになる。

ここに示されるような作品が、少くともそれが誠実な良識ある人間によって書かれてある場合には、それがきわめて有用になってくるのは、まさにこの種の読者に対してである。この作品のなかで述べられたどの事実も、知識の一段階となり、経験を補う教訓となるであろう。いずれの葛藤もみな、人がそれによって自分を練磨する一つの模型である。人々の置かれた境遇に応じて、その模型がいかに応用されるかということだけが残されている。作品全体は道德についての一つの論文であって、それが談笑のうちにみちびかれる。

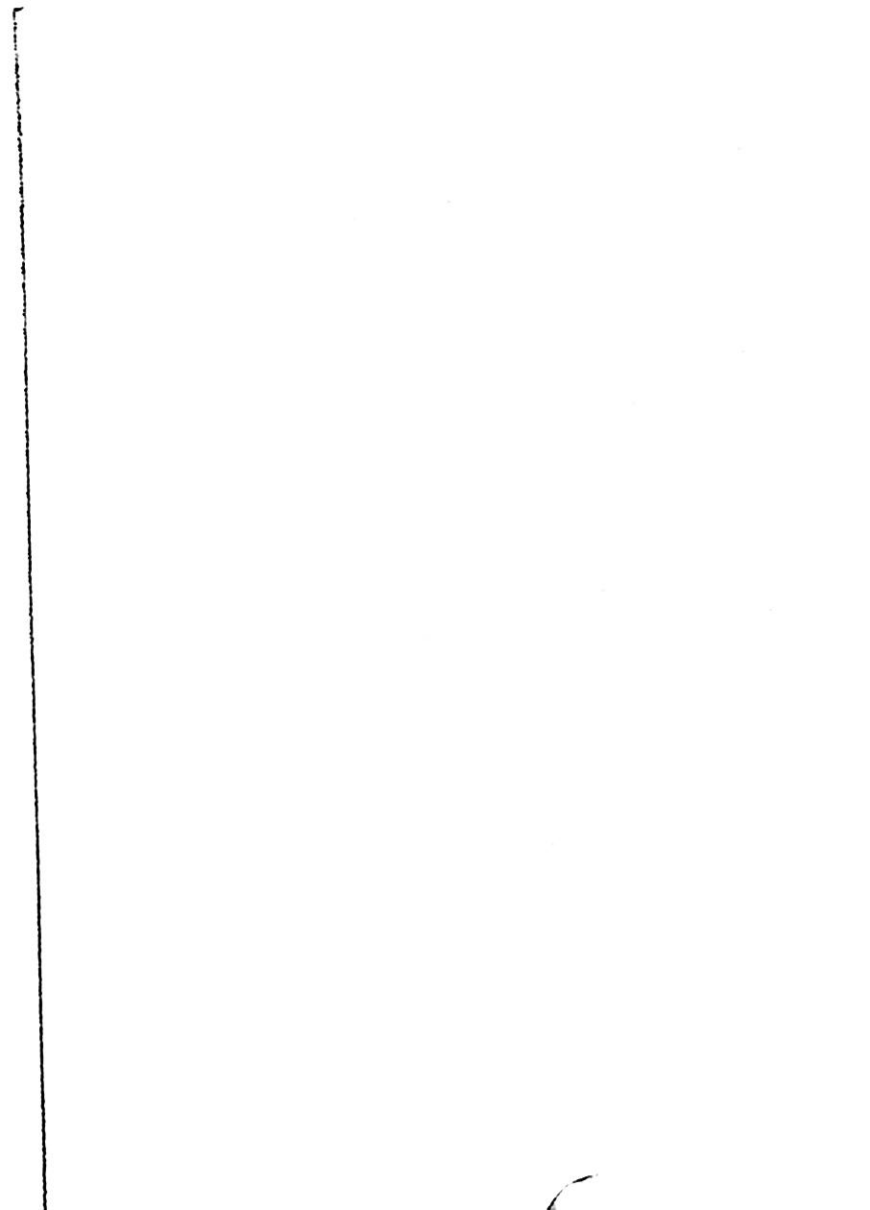
厳格な読者は、私がこの齢になって、運命や恋の物語を書くために筆をとることを苦々しく思われるかもしれない。しかしもし私がここで試みた考察に根柢がありとすれば、この考察が私を庇護するであろうし、万一それがまちがっているなら、私の謬見がそのまま私の弁解となるであろう。

れについて持ち出そうとする理由が、我々の思想と行状とのこの矛盾を十分に説明しないならば、私はまちがっているのである。その理由とは、道徳の掟はことごとく漠然とした一般的原则にすぎないから、それを人間の習癖や行為の個々に対して特殊的に適用することは至難である、ということなのである。

例について見よう。生れついて善良な魂は、親切と慈悲とを好ましい美德であると思ひ、それを実践してみようという気になっている。しかしそれを実践する段になると、しばしば腹がきまらぬ。いまは本当にその機会であろうか。いかなる方法をとるべきかの思案が定まっているであろうか。その目標を誤っていないであろうか。

さまざまの障害が我々の足をとめるのである。我々は思いやりぶかく、寛大でありたいと望みながら、欺あざむかれることを、あまりに傻おろしく、あまりに察しがよすぎれば、軟弱だと思われはしまいかということ、一言にしていえば、慈悲とか親切とかいう一般的概念のうちに、あまりに曖昧あいまいな仕方かたで閉じこめられているいろいろな義務について、これでは度をすぎはしまいか、あるいは不足してはいまいかと、我々は惧おそれるのである。このような不安のうちにあつて、我々の心の傾きを合理的に決定してくれそうなのは、経験もしくは実例しかないのである。ところで、経験というものは、世のあらゆる人々に自由には与えられない特典である。それは人が運命の手で左右されるところの種々の

シュヴァリエ・デ・グリユーとマノン・レスコーの物語



第
一
部



つと、負革を着けて、火縄銃を肩にした一人の選卒が門ぐちに姿を見せたので、私は傍へ来るように手で合図をした。そしてこの混乱の理由を教えてくれるように頼んだ。

「なあに、貴方、と彼は言った。——わたしは仲間といっしょに、一ダースばかりの白首どもを、アーヴル・ド・グラスまでひっぱって行って、そこから奴らをアメリカへ積み込むのです。中には二、三人可愛いのがいるものですから、それが土百姓どもを騒がせているにちがいありません。」

両手を絞って、これは野蛮だ、恐ろしいことだ、かわいそうなことだ、と叫びながら、旅籠屋から飛び出した一人の老婆の絶叫にもし私が足を止められなかったら、この説明を聞いたままで私は通りすぎたかもしれないなかった。私は言った——

「いったいどうしたというのだね。」

「ああ、旦那さま。はいって、ご覧下さいまし。これを見て胸が潰れないでございましょうか。」と彼女は答えた。

好奇心から馬を下りて、それを従僕にあずけ、人ごみを掻き分けて、やっと中にはいった私は、実際、非常に心を打つものを見たのであった。六人ずつ並んで、胴のところを鎖で繋がれた件の一ダースの売笑婦たちのなかで、一人、姿も顔だちもこの場には甚だ不似合な、ほかの様子をさせたなら上流の身分の者と見えたかもしれないぬ女がいた。彼

私が初めてシユヴァリエ・デ・グリユーに出遇った私の生涯のその時代にまで、私は読者を溯らせなければならぬ。それはスペインへ出発するおよそ六ヵ月前であった。隠栖の生活から足を踏み出すのは私には稀なことではあったが、娘を満足させるために私は時々はさまざまの小旅行をこころみた。それもできるだけ短くきりつめはしたが、娘のために私の母方の祖父からその権利をもらっておいてやった或る土地の相続に関する要件で、或る日、彼女の依頼によってルアンのノルマンジー高等法院へ出かけての帰りであった。道を再びエヴルーに取って、最初の夜はそこで泊り、翌日は五、六里離れたパシーに昼食するために立ちよった。この町にはいって驚いたのは、町中の人たちのわいわい騒いでいるのを見たことであつた。彼等は家を飛び出して、群りながら、とある下等な旅籠屋の門口に押し寄せている。そこには二台の幌馬車があつた。まだ繋かれたままの馬は疲労と暑さに激しい息づかいをして、これらの馬車が着いたばかりであることを示していた。この騒ぎの訳を知るためにちよつと私は足を停めたのであつたが、物見高い賤民たちからはなんの説明も得られなかつた。彼等は私の間にふり向きもせず、大変な混雑のうちに互いに押し合いながら、どんどん旅籠屋の方へと進んで行った。や

私は部屋の隅へ振り向いた。そこにはその青年が坐っていた。彼は深い物思いに沈んでゐるらしかった。私はかつてこれほどまでなまなましい苦悩の姿を見たことはなかつた。身なりはごく質素であつたが、一目見て、家柄もよく教育もある男であることがわかる。私は彼に近づいた。彼は立ち上つた。そうして私はその眼に、その容貌に、またあらゆるその動作に、非常に敏感で、また高貴な様子のあるのを見て、自然に彼に好意をもつようになってゐるのを覚えた。

「どうぞそのまま、と彼の傍に腰を下して私は話しかけた。——あの美しい方について承わりたいと思いますが、いかがでしょうか。こんなお気の毒な目に遭われるような方とはどうしても思われぬのですから。」

彼は自分のことを説明しなくては、女の何者であるかを私に伝えることができず、しかも、彼自身は、余儀ない理由から、なるべく人に知られずにいたのだと正直に答えた。

「けれど私は、この下司どもが感づいてゐるくらいのことはお話しはできるので、と選卒たちを指しながら彼はつづけた。——それは私がそのために世の中で一番不仕合せな人間になつた程、それほど激しい熱情で彼女を愛しているということ。彼女を自由な身にする為に、バリで私はあらゆる手段を尽しましたが、嘆願も、策略も、暴力

女の悲歎も、下着や衣服の汚さも、彼女を少しも醜くはしていなかった。そのために、

彼女を眺めて敬意と憐愍の情を誘われた程であった。しかし彼女は、見物人の眼を避け

ようとして、繫がれた鎖の許す限り、身を反らそうとするのであった。その努力は彼女の慎しみ深い心から来るように見えた程、まったく自然であった。この不仕合せな一隊に付き添っている六人の監視人も同じ部屋にいたので、私はその頭株を別室に連れて行って、この美しい女の身の上について二、三の説明を要求したが、私の得たものはごく一般的なものに留まっていた。

「我々は、警視總監の命令によって、彼女をオピタルから連れて来たのです、と彼は言った。——善いことをして、あんな処へ監禁されるはずはありません。私は途々、女に何度も尋ねたのですが、彼女は強情を張って一言も返答をしません。特に彼女だけに眼をかけてやれという命令を受けている訳ではありませんが、あの女には多少の考慮を払うことを私は惜みません。仲間の女たちよりは少しく値打があるように私には思えますから。あすこに一人の青年がおります、と選卒長は附け加えた。——あの男なら私よりもっとよく、あの女のはずかしい目に逢ったいわれを貴方にお話してできるとおもいます。あの男はパリから、ほとんど泣き通して女に附いて来ました。女の兄弟か、でなけりや情夫にちがいありません。」

す。」

かなり落ち着いてこの物語をする様子ではあったが、語り終えて彼は涙をとどめ得なかつた。この恋物語は私には世にも異様に、世にも傷ましく思われた。

「強いて、と私は言った。——あなたの事件の秘密を打ち明けて下さいと申すのではありません。けれど、もし私があなたのお役に立つことができずなら、喜んでなんでもいたしましょう。」

——ああ！ と彼は言いつづけた。——私の前途にはなんの希望もありません。苛酷な運命に私は盲従しなければならぬのです。私はアメリカへ行くつもりです。あそこでは愛する者とともに私は少くとも自由でしょう。私は一人の友人に手紙を書きました。その友人はアーヴル・ド・グラスで多少の援助をしてくれましょう。ただあそこへ行くとために、そしてこのかわいそうな女に、と彼は悲しげにその恋人を眺めて附け加えた。——途中少しでも気を休めてやりたいばかりに、私は苦勞するのです。

——お気の毒な、と私は言った。——一つあなたのお困りをなくしてあげましょう。ここに少しばかりの金がありますが、どうぞ納めて下さい。ほかにお役に立つことができないうで残念ですが。

看守どもの気づかないうちに、私は彼に四ルイ（一ルイは二十四フランの値の昔の金貨）の

も私にはなんの役にも立ちませんでした。私は彼女が、よし世界の果てまで行かねばならぬとしても、その後を追って行こうと決心しました。彼女といっしょに私は船に乗るつもりです。アメリカへも渡るつもりです。ただ、何よりもひどい仕打ちは、この卑劣な奴らが、と彼は選卒たちのことをいって附け加えた。——彼女に近よることを私に許そうとしないことです。私の計画は、パリから数里離れたところで、公然と彼等を襲撃することでした。私はかなりの金額で、腕をかそうと約束した四人の男をかたらいましたが、奴らは裏切者で、さあとという時には私だけおきざりにして、つまり金をまき上げたまま逃げてしまったのです。暴力で成功するのが不可能だとわかった私は武器を棄てました。私は選卒らに報酬を払うことにして、せめていっしょに行くことを許してほしいと申し出ました。儲け仕事だというので彼等は同意しました。彼等は私に、恋人に話しかける自由を与えるたびごとに、報酬を要求しました。僅かの間に私の財布はすっかり空になってしまいました。ところで、もう一文無しになってしまうと、彼等は私がひと足彼女に近づいても、無法にも荒々しく私を突きとばすのです。彼等の威嚇に頓着なしに無理にも近よろうとしますと、きつと傲慢にも鉄砲の尖を私に突きつけます。彼等の貪欲を満足させて、その上歩いてでも道をつづけようというには、今まで自分の役に立っていた、上等でもない乗馬をどうしてもここで売らなければならぬようなわけ

す。

り落ち着、の物語をする様子ではあったが、語り終えて彼は涙をとどめ得な

さと烈しい感情の心とは、彼が何者かに生れついていることを、私の恩恵の決して無駄でなかったことを、私に納得させた。出発に先だって私はその恋人にも言葉をかけた。彼女は実に優しく、実に愛らしい淑かきをもつて私に答えた。そのために、そこを離れてからも、女というもののもつ解きがたい性質について、私はさまざまの考察をめぐらさずにはいられなかった。

隠栖の生活に帰った私は、この情事のその後の成り行きについては少しも知るところがなかった。二年に近い月日が流れた。私はそんなことをまるで忘れてしまっていたのである、偶然が私にあらゆるその曲折を限なく教える機会を生んでくれるまでは。私は、弟子にあたる某侯爵とロンドンからカレーに到着していた。記憶に誤りがないなら、私たちはリオン・ドールに宿を取った。或る理由があつて私たちはその日一日と次の夜をそこで過ぎねばならなかった。午後街を歩いていて、私は、あのパシーで出遇ったことのある同じ青年だなどおもう人を見かけた。だが、その人は甚だみすばらしい身なりで、この前に逢った時から見ると顔色もひどく蒼ざめていた。この町に着いたばかりらしく、片腕に一個の古びた旅行鞆を抱えていた。しかし、彼は非常に美しい容貌をしていたので、容易にそれとうなずかれた。私はすぐにあの青年だときめた。

「我々は、と私は侯爵に言った。——あの青年にぜひ言葉をかけたい。」

金貨を与えた。なぜなら、もし奴らがこれを知ったなら、いよいよその目こぼしを高価に売りつけるにきまっているのだから。私は更に、この恋する青年がアーヴルまで絶えず恋人と自由に話して行けるように、看守たちと契約を結ぶ気になった。私は首領株の男に合図をして自分のそばに呼んだ。そうしてそれを提議した。その厚顔無恥に似合わず、彼は羞しはづかそうなふうであった。

「私どもは何もあの青年が女に話しかけるのを拒むひというのではありません、と彼は困った様子で答えた。——しかしあの人はのべつに女のそばにおりたがります。それがどうも私どもには困るのです。あの人が邪魔をする代価として金を払うのは当然だと思います。」

——それじゃ、と私は言った。——その邪魔になるのが気にならないようにするにはどうすればいいんだね。

彼は大胆にも二ルイを要求した。私は即座にそれを与えた。

「しかし、と私は言った。——狡いこづことをしては困るよ。この若い人にわたしの処書しよを残して置くからな、わたしになんでも報告できるように。それにわたしは君たちを処罰する力をもたないわけでもないことを心得ておいてもらいたいな。」

私には金貨六ルイの失費であった。この未知の青年が私に礼を述べたその率直な嬉し

話いたします。私をお咎めになりながらも、きっとあなたは私をかわいそうに思ひ下さるに相違ありません。」

私がここで読者に告げなければならぬのは、彼の物語を聴くやいなやただちに私がそれを筆に上したことである。それゆえ、この物語以上に正確で忠実なものとは決してないのを人は信じてよろしい。この年若い恋の冒険者が世にも秀れた雅かさをもつて語ったところの、さまざま反省と、さまざま感慨との関係に至るまで、私は忠実であることを志した。ではここにその物語がある。最後に至るまで、彼の言葉でないようなものは一言も私は混えないであろう。

* * *

『私は十七歳であった。そうして、P...の名家の一つに属する私の両親が、私を遊学させたアマリアンで私は哲学の課業を終了した。先生たちが私を学校中の模範に推挙した程、私はそれほど慎しみ深い、また几帳面な生活を送ったのであった。それも私がこの賞讃に値いするために格別の努力をしたというのではなく、ただ生れながらにして温良な、かつ、物静かな気質を私はもっていた。私は好んで学問に身を入れた。そして人は私の長所として、悪徳に対する生れながらの憎しみを数えるのであった。私の門地や、

今度はその青年の方で私だということをお願い出した時の、その烈しい歎きは筆紙に尽し難いものであった。

「ああ、あなた！　と彼は私の手に接吻しながら叫んだ。——死んでも忘れられない御恩に対して私はもう一度、あなたに御礼を申し上げることができました。」

どこから来たのかと私は訊いた。船でアーヴル・ド・グラーヌから着いたところで、そこにはつい先日、アメリカから帰ったばかりなのだと言った。彼は答えた。

「お見受けするところあまりお金をお持ちでないようだが、と私は言った。——リオン・ドールへおいでなさい。あすここに私は泊っています。私もすぐ引き返してこいっしょになりますよ。」

私は実際引き返した、彼の運命のくわしい物語やそのアメリカ旅行のいきさつを、いち早く知りたいと焦りながら。彼のために何かと私は好意を示して、人にもよく命じてなんの不自由もないようにしてやった。彼は私にその身上話をせがまれようとはまるで思いもかけなかった。

「あなたはこれ程まで親切にして下さいます。ですからあなたに匿し立てをしましては卑しむべき忘恩者として心が咎めます。何もかもお話ししましょう。私の不仕合せのことや苦勞のことばかりでなく、私の不始末のことも、私の一番恥しい欠点もお

なら、私は自分の幸運と名声の難破から何物かは救い得たであつたらうに。しかしながら彼は、さまざまその心遣いがなんの役にも立たず、時々は、それに腹を立て、それを煩さがった恩知らずによって、冷酷に報いられるのを見る悲歎よりほかには、なんの得るところもなかつたのである。

私はアミアンを出発する日を決定していた。ああ！ どうして私はもう一日それを早めなかつたのであろう。そうしたら私はあらゆる私の純潔を父の家にとって帰られたであらうに。この町を去るべきちょうどその前夜であつた。私は、友人——その名をチベルジュと呼んだが——とともに散歩していたとき、私たちはアラスから駅馬車の着いたのを見た。私たちはそのような駅馬車の着く旅籠屋まで後をつけて歩いて行つた。私たちはただ好奇心に駆られたまでのことであつた。馬車からは数人の女が姿を見せたが、すぐ中へはいってしまった。ただ一人、非常に若い女だけが後に残っていた。彼女は、その監督者らしい年當の男が、荷物籠から自分の手廻りの道具をひっぱり出させるのに夢中になつてゐるあいだ、独り中庭にじつとしていた。未だかつて異性のことを考えたこともなければ、注意して女を眺めたこともない私が、私は言うが、その賢さと慎しみ深さをあらゆる人々に嘆賞されていた私が、一挙にしてのぼせ上つてしまふまで情熱を煽られた程、それほど彼女がうるわしく私におもわれたのである。極端にまで臆病であ

学業の優秀なこと、及び容貌の与える快感によって、私は町中の教養ある人々に知られ、かつ、衆望を集めた。私は実に各方面の人々の噴賞のうちに公開の演習を終ったのであって、そこに出席していた司教様が、私に僧階に入ることを奨めたほどであった。両親たちの希望である十字軍隊にはいるより、むしろそうした方がいっそうまちがいなく榮譽を得るであろうと、司教様は言われるのであった。両親は既に私をシュヴァリエ・デ・グリュウという名で呼び、十字章を私に佩用させていたのである。

休暇が来たので、私は父の家に帰省する準備をしていた。父は私をまもなくアカデミー(2)に入れてくれる約束であった。アミアンを去るに当って私のただ一つの心残りは、常に愛情をこめて交っていた一人の友人をそこに置いてゆくことであった。彼は私より幾つか年上であった。私たちはいっしょに教育されたのであった。彼の家には財産らしいものがほとんどなかったから、彼は僧侶になつて、私が去つた後にもアミアンに留り、この職業にふさわしい勉強をしなければならなかった。彼は多くの良い性質を備えていた。あなたは、今後の私の物語で、世にも秀れたさまざまの美点を、取りわけ昔の最も有名な例をさえ凌駕する、熱烈と同時に寛大な友情を彼に見るであろう。もしもあのとき私が彼の忠言に従っていたなら、私はいつまでも賢明で、幸福であつたであろうに。少くとも、私の情熱が私をひきずり込んだあの危険な時に、彼の非難を受け入れていた

悲哀の姿が、と言わんよりは、むしろ私を奈落へと引き入れてゆく私の宿命の強い力が、ひと時も私に返答をためらうことを許さなかった。私は彼女に断言した。もし彼女が私の節操と、彼女が既に私の心に吹きこんだ限りない愛情とを、多少でも信じようとしてくれるなら、私はいのちにかけて彼女をその両親の暴圧から救い出し、彼女を幸福に見せるであらうと。これを思い返すたびごとに私は、自分の思いを打ちあげたあの時の、あれ程までの大胆さと淀みなさとはいったいどこから自分に来たのかと、幾度も驚くのである。だがさまざまな奇蹟を行えばこそ、人は恋に神性を与えるのである。私は差し迫った多くのことを言いたした。この見知らぬ美しい人は、私くらいな年配では人をだませるものでないことを十分に心得ていた。彼女は、もしも私が彼女を自由にしてくれる少しの希望でも見つけ出せるなら、いのちよりもっと大切なものを私に払わねばならぬように思う、と私に告白した。私はなんでもやって見るつもりでいるのだと彼女に繰り返して言った。しかし、彼女を助ける手段を即座に思いつけるほど経験を積んでいない私は、二人にとって、力強い助けにはなりそうにない、こんな当てのない確信にすがりついていたのであった。

彼女の老監督者が私たちの仲へはいつて来たとき、もし彼女が私の機智のないのを十分に補^{ひき}ってくれなかったら、私の希望はもう少して失敗するところであった。この監督

るとともに、容易に節度を失ってしまうのは私のもつ弱点であった。しかしながらあの時は、この気の弱さのために思いとどまるところか、私は進んでこの意中の恋人の方へと歩み寄った。彼女はまだ私よりは年下であったが、困った様子も見せず、私の挨拶を受け入れた。私は彼女がアミアンにやって来た理由や、この町に誰か知人でもあるのかと訊ねた。彼女はここで尼になるために両親から差し送られたのだと素直に答えた。私はこの計画を自分の願望に対する致命的な打撃であると考えた程、恋は私の心に生れた瞬間からすでにそれほどまで私に智恵づけていた。私は彼女に自分の思いがわかってくれるように語った。なぜなら彼女は私よりも遥かにまかせてもいたのだから。人が彼女を修道院へ送ったのは、疑いもなくその享樂的な性癖を——それは既に芽を出して、そうして、のちにおいて彼女と私とのあらゆる不幸を惹き起したものであったが——矯め直すため、彼女の意志に反してのことであった。私は彼女の両親のこの残酷な意向を、生れかかった私の恋と学校式の雄弁とが私に暗示してくれたところの、あらゆる論理によって攻撃した。彼女は冷淡な様子でも、侮っているふうでもなかった。彼女はちよつと黙っていた後に、これから不仕合せになって行くのはわかり切っているけれども、それを避ける方法は全然自分には残されていないのだから、これは紛れもなく神の意志であると私に言った。彼女のまなざしの香わしき、これらの言葉を述べる時の魅惑的な

コー嬢は——人はそう呼ぶのだと彼女は言った——彼女の魅力の効果を見て非常に満足であるらしかった。私も、彼女が私に劣らず感動しているのを見たと思つた。彼女は私を愛らしく思うこと、私のお蔭で自由になれたのを堪らなく嬉しく思うことを私に告白した。彼女は私の身分を知りたがつた。そしてそれがわかるといよいよ愛情を高めた。なぜなら、庶民の生れである彼女は私のような愛人を手に入れたことに得意であつたらだ。私たちは二人つきりになれる方法について話し合つた。いろいろ考えたあとで、私たちは逃走するよりほかの方法を考えつくことができなかった。それにはこの監督者の監視を欺かなければならない。彼は一人の召使にすぎなかつたけれども、油断のならぬ男であつた。結局、私が夜の間、駅馬車を用意して、朝早く彼女が眼をさます前に再び宿屋へやつて来て、二人でこっそりと姿を匿し、その足でまっすぐにパリへ行き、着く早々に結婚することに話をきめた。小遣金を貯めて置いたのが私にはおよそ五十エキュ（一エキュは三フランに当る昔の銀貨）あつた。彼女はほほその倍額をもつていた。私たちは世間知らずの子供のように、この金が決してなくなることはないもの、と、そうして、ほかのいろいろの手はずも、やっぱり成功しないことはあるまいときめこんでいた。

かつて味つたこともないような満足の心をもつて夕飯を終つたあとで、私は計画を実行する為に席を立つた。翌日、父の家へ帰るつもりで、私の手荷物には既に用意が出来て

者がやって来たとき、彼女が私を従兄と呼び、狼狽の色さえ見せず、アミアンで私に逢えて大変に好都合だから、楽しく夕飯を共にできるように、修道院入りは明日に延ばした、と私に言ったのには驚いてしまった。この計略の意味は私にもよくわかったので、私は永らく父の馭者を勤めていた男がその後アミアンで宿屋の主人となっていて、私のいうことなら何事に限らずよくきいてくれることを話して、そこに泊ることを彼女に勧めた。老監督者が多少不服であるように見え、またなんのことやら訳がわからずにいる友人のチベルジュが、一言もものを言わずに私に随いて来た中を、私は自分で彼女をその宿屋に案内した。この友人は私たちの会話をすこしも聞いていなかったのだ。私が美しい私の恋人に恋を語っていたあいだ、彼はただ中庭を散歩していたのであった。私には彼の頭の下さが恐ろしかったので、用事を頼むことにかこつけて彼を遠ざけることにした。こんなふうにして私は、宿屋に着いて、私の心の女王と二人きりで語り合う楽しさをもった。

まもなく私は自分で考えている程には子供でなくなっているのに気がついた。私の心は今まで夢にも知らなかったさまざまな快楽の感情に眼をきました。甘美な熱が私の全血管にひろがりうずいた。私は一種の逆上のうちに在った。この逆上のために私の声はしばらく自由を奪われ、ただ私の眼を通してのみものをいうのであった。マノン・レス

くれた。そうしてこの資格は多少の信頼と正直を君に要求するよ。」

彼はそんなにも力強く、また長い間、秘密を明かすことを私に迫ったので、今まで何一つ彼に匿^{かく}しだてをしたことのない私は、自分の情熱について残る隈なく打ちあけた。彼は私を身慄^{みぞぞ}いさせるような、不満な様子でそれを聞いた。とりわけ私は遁走の計画を彼に言ってしまった自分の不用意を後悔した。そのようなことには全力を挙げて反対せずにはいられぬほど、自分は君の完全な友人であると彼は揚言した。まず私の気を変えさせることができると思うようなことをことごとく並べて見るつもりであるが、それでもなお私がこの憐むべき決心を放棄しないと言うのなら、断然それを阻止することができるといふ人たちに知らせるつもりだと言った。彼はその話に四分の一時間以上も費した真心からの忠告を私に試みた。そして、もし私がつまんと賢明に、理性的に行動することを彼に替わらないならば、私のことを人に知らせるつもりだと、私をおびやかしてこの話を終った。

私はこんなにも軽率に自分の秘密を漏^はらしてしまったことに絶望していた。しかしながら、愛の神は、二、三時間前から極度に神の智慧を開いてくれたので、私はこの計画が明日実行されるはずであることを彼にまだ話していいことに気がついた。で私は不得要領で彼を欺くことに決心した。

いたので、いろいろな手はずはずっとうまく捗った。行李を運ばせたり、町の開門の時刻である朝の五時に馬車を用意させておいたりするのはなんの造作もなかった。ところがおもいもよらなかつたような障害が起つて、そのためにもう少しで私の計画を台なしにするところであつた。

チベルジュは私より僅か三つだけしか年上でなかつたが、思慮に熟した、操身はなほだ堅固な青年であつた。彼はなみなみならぬ愛情をこめて私を愛していた。彼は、マノン嬢のような美しい女を見たこと、彼女を案内するのに私がひどく熱心であつたこと、それに彼を避けて離れようとして私が氣を遣つたことなどから、私が恋をしているのではあるまいかということに疑うようになった。彼は戻つて来て私を不快にしてはと案じて、宿屋に私を残したままもう一度引き返そうとはしなかつたが、そのかわりに下宿で私を待っていた。下宿に帰つて見ると、既に夜の十時であつたが、彼はまだ起きていた。彼の姿を見て私のがっかりした。彼はすぐに、そのことに氣づいた。

「たしかに、と彼はあからさまに言つた。——君は何か僕に話したくない計画をもくろんでいるね。君の様子でそれがわかるよ。」

私はかなり無駄に、自分の計画をいちいち彼に報告する義務はないんだと答えた。「そりゃそうだ、と彼はいいつつけた。——しかし君はいつも僕を友人として遇して

覽になるであろう。

私たちは夜になる前にサン・ドニに着いたほど、それほど前途を急いだ。私は馬車に並んで馬を駆けさせた。そのために私たちは馬を替える時でなければほとんど話ができなかつた。しかし私たちがパリの間近に近づいた時、言いかえればもうほとんど安心だと思つた時、アミアンを出てから何一つ口にしていなかったので、私たちは一息つく時間をこしらえた。マノンに対して私がどれほど熱中していたにしても、彼女もまたそれに劣らず私を思っていてくれることを私に納得させる道を彼女は心得ていた。私たちは二人きりになるのが待ち切れない程、それほどお互いの愛撫において慎しみがなかつた。馭者も宿屋の主人もあきれて私たちを眺めていた。私たちのような年頃の二人の子供が、狂わんまでにお互いに愛し合っているらしいのを見て、彼等がおどろいていることが私にわかつた。私たちの結婚の計画はサン・ドニでは忘れられた。私たちは教会の権利を盗んでしまった。私たちはそんなことを考えても見ずにすでに夫婦であつた。私の篤実な情深い天性からして、もしマノンがつねに私に貞節でさえあつてくれたなら、確かに私の一生は幸福であつたのだ。彼女を知ること深くして、いよいよ私はその中に新しい受すべき特質を発見するのであつた。彼女の才智、その心情、その愛の濃やかさと彼女の麗しき、これらはそんなにも力強い、かつ、懽感的な鎖となつていた。それゆえ、私

「チベルジュ、と私は呼んだ。——僕は今まで君が僕の友人であることを信じていた。そうして僕はこんな内証話で君を試めそうと思ったのだ。僕が恋をしていることは本当だ。それは嘘じゃない。しかし僕が逃走するというような企ては、いきなり決められるものではない。明日、九時に僕を誘ってくれ給え、できるなら、僕は君に僕の恋人を会わせよう。そして君は、彼女のために僕がこんなに奔走する値打が彼女にあるかどうか判断してくれ給え。」

彼は多くの友情の誓いを述べた後で、私を一人あとに残した。私は夜通しかかって用事を片づけ、明け方頃に再びマノン嬢の宿屋に行つて見ると、彼女は待っていた。道路に面した窓のところに彼女がいたので、私の姿を見ると、自分で戸をあけて来てくれた。物音を忍んで私たちは外へ出た。彼女の荷物というのは肌着の類だけであった。それは私が自分で引き受けた。馬車は既に出発するばかりになっていた。私たちはすぐさま町を遠ざかった。

私はのちになって、チベルジュが私に睨にらまれたのを知った時、どんな行動を取ったかを語るであろう。彼の友情はこのために衰えはしなかった。それどころか、どれ程の強さまでに彼はそれを昂たかめたかを、そうしてそれに対する私の代償が、常にいかなるものであったかを思うとき、いかに私は悔恨の涙を流さなければならぬかを、あなたはし

多少はそれに加っていることを彼女に言って聞かせた。なぜなら私たちの金はほとんど尽きていたし、それに金はいつまでもあるものだというような見から私は眼がさめだしていたから。マノンはこの提案に対して冷淡であった。しかしながら、彼女がそれに異議を申し立てたのは彼女の愛情そのものからであり、また私たちの匿れ家を知ったあとで、父がこの計画に少しも賛成してくれなかったとしたら、私を失うかもしれないという危惧からでもあるのに過ぎないのだから、私には何人か（なんびと）に残酷な一撃を私に加える用意をしようなどとは夢にも思われなかったのである。「必要」の動機からと言ったのに反対して、彼女は私たちにはなお数週間暮らすに十分な金が残っているし、それがなくなってしまうえば田舎（いんか）にいる彼女の或る親戚に手紙を書いて、その同情にすがり、金の出処を見つめるつもりだと私に答えた。彼女はこの反対意見をいかにも優しい、また情熱的な愛撫（あはれ）で和（な）げたものだから、彼女の心の中にのみ生き、彼女の心をいささかも疑わない私は、彼女の返事とその決心に全然賛成してしまった。

私たちの財布の処置と、日々の費（た）えを支払う面倒とを私は彼女に任（まか）せてあった。まもなく私は、私たちの食卓の上が以前よりはずっと賑（にぎ）やかであり、それに彼女がなかなか高価な装身具を着けているのに気がついた。私たちにはやっと十二ないし十五ピストール（一ピストールは約十フランの値の昔の金貨）しか残っていないことを私は知らないではな

は自分の全幸福を賭けてもそこから決して身を脱したくなかったのだ。それがまたなんというおそろしい変化ではないか。私の絶望であるものが私の至上の幸福で有り得たのだ。あらゆる運命のうち最も楽しいものを、恋の最も完全な報いを期待していたこの堅い心そのもののために、私はすべての人間のうちで最も不幸なものとなっているのだ。

私たちはパリで家具附の部屋を借りた。それはV：街に在った。そうして、私に取って不幸にも、有名な司税官B：氏の邸宅と隣り合せであった。三週間は、私の家のことや、私がゆくえ知れずになったために父が味ったにちがいない悲しみなぞ、まるで考えもしなかった程、そんなにも私は自分の情熱に充たされたままで過ぎ去った。しかしながら、私の行為は放蕩はうたうというのには全然当らなかつたし、マノンにしてもまた非常に慎しみ深く振る舞つたので、私たちの生活が落ちついてくるにつれて私の義務についての観念を少しづつ思い出させるのに役立つた。できるなら、私は父と和解したいと決心した。私の恋人はそんなにも美しかつたから、もし父に彼女の賢さとその値打を知らせる手だてを私が見つけ出せるなら、彼女が父の気に入るようになることを私は少しも疑わなかつた。一言で言えば、彼女と結婚する自由を、父の同意なしでも得られるという希望の間違っていることを知った私が、父からその同意を得ようと思ひ込んだのだ。

私はこの思惑をマノンに伝えた。そして恋や義務の動機のほか、必要の動機もまた

泣き始めたのであった。私は部屋の中へはいる力をまったく失ったほど、混乱して、立ちどまった。私は用事を口実にして下へ降りる決心をした。そうしてこの少女には、奥様には私がすぐ帰って来ると言うこと、しかしお前がB：氏のことを私に話したことは知らせないようにしろと命令した。

私の狼狽と落胆とは実に大きかったから、階段を下りながらも、なんの感情からともわからずに私は涙を流すのであった。私は最初に眼についたカフェにとびこんだ。そうして、とある卓子ツエに腰を下して、自分の心に現われて来るものをそれからそれへと解きほぐしてみるために両手の上に頭をもたせかけた。私は今しがた耳にしたことを押し切って思い出そうとはしなかった。私はそれを幻覚だと考えたかったのだ。そして何も気づかないふりをして家に帰ろうと私は二、三度も用意をした。マノンが私を裏切ろうなぞ、まったく私には有り得ることとは思われなかった。それほど彼女を疑うことによって彼女を侮辱するのを私は恐れたのだ。私は彼女を溺愛していた。それは確かだ。けれど彼女は私の与えた愛のあかしには常に酬たまいてくれたのだ。私は自分より真面目でも貞節でもないとしてどうして彼女を責めなどしたろう。そんなおぼえはない。なんの理由があつて彼女は私を欺いたのだ。彼女が私をその最も濃こやかな愛撫で飽満あたまさせたのは、そうして私の愛撫を感激して受けたのは、つい三時間前のことではなかったか。私は彼

だったので、私は彼女に、眼に見えて私たちの金持になって行くのを驚いて見せた。彼女は笑いながら心配せずについてくれと私に頼んだ。彼女は言った。

「お金の蔓を見つけると、私はあなたにお約束したのではなくって？」

私が容易に不安を感じるためには、私の恋はあまりに単純であった。

ある日のこと、彼女にはふだんよりも帰りが遅くなると言って、午後私は外出したのであったが、帰ってみて驚いたのは、二、三分も戸の外で待たされたことであつた。私たちは、自分たちと同一歳ぐらいな少女を召使っているだけであつた。彼女が戸を開けて来たので、私は彼女にどうしてこんなに長いことぐずついていたのかと訊ねた。彼女は困った様子で、戸をお叩きになったのが聞えなかつたものですからと答えた。私は一度しか叩きはしなかつた。私は言った。

「けれども、もしお前にわたしの叩いたのが聞えなかつたのなら、どうして戸を開けにやって来たのだ。」

この質問は彼女を非常に狼狽させた。それゆえ、とっさに答えるだけ十分の機智をもたなかつた彼女は、それは自分の咎とがではないことや、奥様が、部屋の向う側の階段からB：様の出てしまわれるまで戸を開けてはならないと言われたのですと断言しながら、

多くのことに関係のある、顔の広い人だ。マノンの親戚の人たちは彼女にいくらかの金を渡すのにこの人を頼んだのであろう。おそらく彼女はもう既に彼から金を受け取っていたのだ。今日やって来たのはあらためてまた持って来たのだ。自分を愉快に驚かせるために、彼女はきつと衣囊（ぶくろ）に隠していたのにちがいない。もし自分がこんな処へ来て心配するかわり、いつものように帰ったら、おそらく彼女は私にそのことを話したかもしれないのだ。私が自分からそれを言いだしたら、彼女は少くとも匿すようなことはないであろう、と。

私はこの考えにすっかり満足したので、自分の悲しみをすこし減らすことができた。私はすぐ家に帰り、いつものように優しくマノンに接吻した。彼女はいいそと私を迎えた。最初は、いっそう確実だと思ふようになった私の推測を彼女に打ち明けたい気に駆られたが、おそらく彼女が先手を打って、今までのことをすっかり自分に話してくれるだろうという望みから、私はそれを思いとどまった。

夕食の用意が出来た。私は非常に陽気そうに食卓についた。しかしながら二人の間に置かれた蠟燭の光りで、私は愛する女の顔に、その眼の中に、悲しむ色のあるのを見たように思った。このかんがえは私にもまた悲しみを誘った。彼女のまなざしが常ならぬ様子で私にそそがれているのにも私は気づいた。それは恋から来たのであろうか、それ

女の心より自分の心の方がいつそうわからなくなってしまった。

「いや、いや、と私は考えつづけた。——マノンが私を裏切るなんて有り得ることはない。私が彼女のためにのみ生きていくことは彼女の知らないことではない。私が彼女を心から愛しているのは知り過ぎていくほどだ。私を裏切る理由はまったくない。」

しかしながらB：氏の訪問と、彼が密かに脱れ出したことは私を悩ませるのであった。

私はまた私たちの現在の財産では及びもつかないように思われるマノンの細々とした買物のことを思うのであった。それは新しい情夫の財産を思わせるものであった。それから、私には合点のつかぬ金の出処についてかつて彼女が私に示した、あの落ち着きぶりはそもそもなんなのであるか。こんなさまさまの謎に対して自分の心が願うような都合の好い解釈を与えるのは私には困難であった。一方、私たちがバリに來て以來、彼女から眼を離れたことはほとんどなかった。仕事でも、散歩でも、私たちはいつも肩を並べていた。ああ！ 片時離れるのさえ私たちには耐（た）えられない苦痛であったのに。お互いに愛しあっていることを絶えず私たちは口にしなければならなかったのだ。でなければ私たちは不安のあまり死んでしまったことであろう。それゆえ、マノンがただの束の間でも私より以外の男に心を奪われようとはどんなにしても私には考えられないのであった。ついに私はこの神秘の鍵を見つけたと思った。私は自分に言ってきかせた。B：氏は

私は考えた。私は自分で扉をあけに行つた。戸をあけた瞬間に私は三人の男につかまへられていたのである。見覚えで彼等は父の従僕たちであることがわかつた。彼等は私に手荒なことは少しもしなかつたが、その中の二人は私の腕を捕え、三人目のが私の衣囊を探つて私の携えた唯一の刃物であるナイフを取り出した。彼等は、失礼だが止むを得ませんので、と私に寛恕を求めた。彼等は正直に、父の命令でやったこと、また下には馬車で兄が待っていることを言つた。私はすっかり混乱していたので、抵抗もしなければ口答えもせず、連れて行かれるがままであつた。実際兄は待っていた。私は馬車の中に、兄の傍に乗せられた。命令を受けた馭者は、全速力でサン・ドニまで私たちを運んだ。兄は優しく私を抱いたが、一言も物をいわない。そのため私は自分の不運を罵と考へるに必要な暇を十分もつたのであつた。

最初は少しの臆測も許さないほど事件は混沌としていた。自分は残酷に裏切られていたのだ。けれども何者によつてであるか。最初胸に浮んだのはチベルジュであつた。裏切者め、もし俺の疑いが事実であつたなら、貴様を生かしてはおかないぞ、と私は言つた。しかし思い直してみれば彼は私の住んで居る場所を知らないのだから、彼の口から私のことが洩れるはずはないのであつた。マノンを責めるというような罪を私の心はどうしても犯せなかつた。それに圧しつぶされているように思われた彼女のあの並はずれ

とも憐みからであろうか、私はそれを見わけるのに迷ったのであった。そのいずれにせよ、それは甘いと同時に痛々しい感情のように思えたが、私も劣らずに注意して彼女を凝視^かめた。おそらく彼女は私のまなざしから心の姿を判断するのに苦しまなかったであろう。私たちは話そうとも、食事をしようともしなかった。ついに、私は彼女の美しい眼から涙の落ちるのを見た。不貞の涙よ。

「ああ神さま、と私は叫んだ。——いとしいマノンよ。君は泣いている。泣くほど苦しいのだ。それに一言も僕に君の苦しみを打ち明けてはくれないのだね。」

彼女は私の不安を濃くする歎息で答えるばかりであった。私は慄えながら立ち上った。そして恋のもつあらゆる激情で、彼女の涙の原因を打ち明けてくれることを懇願した。彼女の涙を拭^ぬってやりながら私もまた涙をこぼすのであった。私は生きているといわんよりはむしろ死んでいた。私の苦悩と恐怖を眼のあたり眺めては野蛮人といえども感動したのであったらう。

こんなふう^にに私が彼女に気をとられているときに、階段を昇ってくる数人の足音を耳にした。誰かが戸口を静かに叩いた。マノンは私に接吻を与え、そして私の両腕を抜けて、すばやく彼女の部屋にはいるかとおもうと、ただちに扉をしめてその体をかくした。少しばかり取り乱していたから、扉を叩く見知らぬ人の眼にはふれたくないのだらうと、

激しい苦しみであった。亭主も召使たちも私を見覚えていた。同時に彼等は私の本当の身上話をかぎつけたのであった。私は亭主が次のように言うのを耳にした。

「おや、これは六週間前に、惚れ抜いている人とここに寄った綺麗な若様じゃねえのか、すばらしい別嬪さんだったがな。かわいそうに、あんなに仲よくしていたのに、仲を裂くなんざあ殺生な話さ、まったく。」

私は一言も聞えないふりをし、またできるだけ何も見ないようにした。

兄はサン・ドニに二輪馬車をもっていたので、それに乗って私たちは朝早く出発した。そうして翌日の夕がたには家に着いていた。彼は私に先立って父に会い、私のためをはかってくれて、どんなに素直に私が連れられて来たかを話してくれたので、思ったよりずっと寛大に迎えられた。父は、私が無断でゆくえを昏らましていた過失について、二、三の一般的な叱責を加えるだけで満足した。私の情人については、私が見も知らぬ女に身をまかしたりなぞしたのだから、こんな目に遭うのは当然であること、私はもっとと慎しみ深い人間と置いていたこと、しかし今度の小事件に懲りて、これからはもっと賢くなって欲しいと思っただけというようなことを、父は言った。私は父が寛大に自分を恕してくれたことを感謝した。そして品行をいっそう順良に、いっそう規則正しくすることを約束した。心の奥では私は凱歌をあげていたのだった。なぜならことの運び工

た悲哀。あの涙。部屋にひきさがるときに私にあたえたあの愛情の籠った接吻。これらは私には非常な謎であったが、私はそれをお互いの不幸の予感として解釈する傾きがあった。そうして自分を彼女から引き裂いたこの事件に自暴自棄になっっている間にも、彼女が自分よりはなおいっそう不憫に思えるほど馬鹿正直な私であった。とつおいつ考えたあげくのはてに、自分はパリの街上で誰れか知人に見つけられたのだ。それが父の耳にはいったのだ、と、そう決めたのであった。この考えは私を慰めてくれた。私は父の権威上自分が蒙らねばならないであろうところの、叱責や折檻で、ことずみになるだろうときめこんでいた。私はじつとそれを耐えよう。人が自分に要求するものはことごとく果そう。一刻も早くパリに帰り、いとしいマノンにいのちと喜びを返しにゆく機会を容易にするために、と私は決心した。

私たちは、すぐサン・ドニに着いた。私の口を利かないのに驚いた兄は、それを恐怖の結果だと想像した。彼は私を慰めるつもりで、父のきびしいことなどは少しも恐がることのないこと、ただおとなしく本分に帰って、父の抱いていてくれる愛情に背かない心になつてさえくれればよいことを、私に諳け合ってくれるのであった。彼は私にその夜をサン・ドニで明かさせた、私の部屋に要心して三人の下僕を寝かしながら。アミアンからパリへの途中、マノンとともに泊った同じ宿屋に自分の姿を見ることは、私には

えた。

「は、は、は、と父は腹を抱えて大笑した。——そいつはすばらしいね。お前は可愛いお馬鹿さんだよ。お父さんはそんなふうに思っているお前が可愛い。気の毒な殿さまだな。お前を十字軍隊に入隊させるのは大損失だね。お前は辛抱のいい寛大な夫になれる素質をそんなにもっているのだからな。」

父は私のおめでたさ加減とか、軽はずみとかいうことについて、こんなふうな力のあつる嘲笑を無数につけ加えた。ついに私が口をきかなくなってしまったので、父はマノンが私を愛したのはアミアンを出発してから、自分の勘定では、日で数えて、およそ十二日間だと言いつづけた。「なぜなら、と父はつけ加えて、——わたしの知っているのはお前がアミアンを立ったのは先月の二十八日だ。そして今日は二十九日でB：氏が手紙をよこしたのは十一日前だ。あの人がお前のすきな人とすっかり仲よくなるのに八日かかったと仮定するのだね。さて、先月二十八日からこの二十九日まで三十一日。そこから十一と八とを引いて残り十二日。多少の出入りはあるがね。」

すると、再びどっと笑い声が上がった。私はこの悲しい喜劇を最後まで耐えることができるだろうかと危んだほど、胸をかきみだしながら最後まで聴いたのであった。

「お前は知らないんだから、そんならB：氏がお前のお妃の心を手に入れた話をきか

たからである。

家をぬけ出せるのを私は少しも疑わなかつ

皆は晩餐の卓についた。そしてアミアンの征服と、その忠実なる情人との脱出について私をからかった。私はそれらの襲撃を上機嫌で迎えた。自分の心を絶えず占めている問題について自問自答するほど余裕があったから、私は恍惚とさえしていたのであった。しかしながら父の洩らした二、三の言葉は非常な注意をもって私に耳を傾けさせた。父は不貞ということ、並びにB：氏から受けた何か曰くのある世話ぶりについて語ったのだ。この名前が父の口から出たのを聞いて私はすっかりうろたえてしまった。そしてもつとくわしく話してくれるように懇願した。父は兄の方を向いて、まだ話をすっかり聞かせてはいいのかと訊ねた。兄は私が途々たいへん神妙にしていたように見えたので私の狂態を療治するためにこの薬を必要と信じなかつたのだと答えた。私は父がすっかり言ってしまうかどうかとためらっているのを見て、切に願った。そこで父は私の望みをかなえてくれた。と言うよりはむしろ、すべての世の物語のうちで、この上もなく怖いものをもって残酷に私をやっつけたのであった。

父はまず、私が単純にも自分の恋人に愛せられていと常に信じていたかどうかを尋ねた。私はそれについては十分に確信しているから、絶対に疑いを挿まないと勇敢に答

傾け尽してくれた。私は父の言葉に耳を傾けながら、一言も聞いてないのであった。私は父の膝にすがりついた。そうして、両掌を合せながら、どうぞ今一度私をパリへやって、あのB…の奴を刺し殺させて下さいと懇願した。

「大違いです。と私は言った。——あいつはマノンの心を手に入れたのではありません。暴力に訴えたのです。媚薬か毒薬で、女を誘惑したのです。たぶん乱暴な無理強いをしたのです。マノンは私を愛しています。それを知らないでどうしましょう。あいつはマノンを、匕首でもって脅迫して、無理に私を棄てさせたのです。あんな美しい女を奪うためですもの、あいつは何をするかわかりません。おお、神さま、神さま、マノンが裏切ろうなんて、私を愛することをやめようなんて、そんなことがあるものですか。」

一刻も早くパリへ帰るのだと四六時中私は口走るし、そのためには時をかまわず起き出しさえするので、父は私のように昂奮しては、どんなにしてもおさえることができないのを十分に着て取った。そこで私を高い処に在る部屋へ連れてゆき、二人の召使をいっしょに残して私を監視させた。私は自制心をまるで失っていた。ほんの十五分でもパリに居られるなら、私は自分のいのちをいくらでも棄てたであつたらう。なにもかも、あけすけに言ってしまったのだから、容易に部屋を出してもらえないことはわかっていて。私は窓の高さを目で計ったが、そこから逃げて出ることはとうてい不可能な

せてやろう。というのはあの男はわたしを愚弄しているのだ。彼がお前から女を奪う気になったのは、慾得をはなれてわたしへの親切な心づくしから出たのだと、わたしに説得しようとするのだ。そんな高尚な感情をあんな男に期待しなければならぬのさ。それにしてもわたしは彼と一面識もないんだがね。お前がわたしの倅であるのを彼は女から聞いたのだ。そしてお前を厄介払いしようというので、わたしに手紙をよこして、お前のいどころとだらしない生活を報告して、それと同時にお前をつかまえるには助太刀が要るといふことも教えてくれたのだ。そうしておいて、自ら進んでお前の首っ玉を押しやる方法を案にしてあげようと申し出たのだ。兄さんがお前に不意打をくらわす機会を見つけたのは、彼と、それにお前の恋人の指図によるのだ。今こそお前の勝利がどれだけつついたかを祝うがいい。シュヴァリエ、お前の征服はなかなか早かったのだが、勝利品をいつまでも手もとに置いておくことができなかったのさ。」

一語、一語が胸に食い入るこの物語を、私はこの上長く聞いて堪えしのぶ力がなかった。私は食卓から立ちあがった。そして食堂を出ようとして四足も歩かないうちに、床の上に気を失って倒れたのであった。敏速な手当てで私は意識をとり戻した。そうして眼を開いては滝つ瀬のような涙を流し、口をあけては世にも悲しげな、人の心を扶るような溜め息をついたのであった。私を常に優しく愛していた父は、私を慰めるために愛情を

を受けたあとだもの、むしろそうするのが当然かもしれないのだ。けれど、罰あたりのマノンを思いきれない自分は、死ぬこと以上に苦しいのだ。」

いつまでも、こんなに激しく心を痛めている私を眺めて父は意外に思うのであった。私に名替心のあることを父は知っていたし、彼女の裏切りが私をして女を軽蔑させたに相違ないのだから、父は私の強情を、特にこの情熱から来たというよりは、色好みの私の性質によるのだと考えた。父はこの考えにひどくとらわれていたので、自分自身の深い愛情に相談しただけで、ある日それを打ち明けにやってきた。

「シユヴァリエ、と父は私に声をかけた。——わたしは今までお前に十字軍隊の十字章を佩用（はくよう）させることにしていた。けれどお前の気質はそれに向かないようにわたしは思う。お前は綺麗な女が好きなのだ。だから一つお前の気に入るようなのを探してやろうと思う。それについて考えがあるなら素直にわたしに話すがいい。」

私はもはや女と名のつくものに差別を置かれないことを、またこの不幸の直後では、どの女も等しく厭（いと）わしいことを答えた。

「わたしはマノンに似て、もっと貞淑（けいしよ）なのを一人探してやろう。」と父は微笑を含んでつぶけるのであった。

——ああ、もしお父さんが私に慈愛をもって下さるのでしたら、と私は言った。——

を見て、今度は二人の召使たちに優しく話しかけた。私はさまざまな誓約をくりかえして、もし彼等が私の脱走に同意してくれば、いつか金持にしてやろうと約束した。私は彼等を強要し、懐柔し、威嚇した。けれどこの試みも依然として無益であった。そこで私はすべての希望を失ってしまった。私は死を決した。そして死んでもここを離れるものかと、寝床の上に軀をほうりだした。

その夜も、次の日も、私はこのままで過した。翌日人が持ってきた食物を私は拒絶した。午後父は私を見にやって来た。彼の慈悲深さは世にもやさしい慰めの言葉で私の苦しみを和らげようとするのであった。そして私がその命令を尊敬して父の言葉に従ったほど、断乎として何か食べなければならぬと命じた。数日が過ぎた。その間も私は父の面前でなければ、また父にしたがうため以外には一物も口にはしなかった。父は毎日、私が本心にたちかえり、かつは不貞なマノンに対する軽蔑を吹きこもうと、条理をつくして言いよかせるのを止めなかった。いうまでもなく私はもはやマノンを信じてはいなかった。世の中で最も浮気な、最も不誠実な女をどうして私が信じよう。けれど彼女の面影が、私の心の奥底に在るその醜しい顔だが、いつまでもそこを消え去りはしないのであった。私はそれをまざまざと感じるのであった。

「自分には死ぬことはなんでもないのだ、と私は独言ちた。——これほど恥辱と苦痛

父は私の計画がどういふのか知りたいと望んだ。

「パリへ行くんです、と私は言った。——B…の邸に火をつけるんです。そしてあいつをあの不貞腐れのマノンといっしょに猛火の中で焼き殺してやるのです。」

この激昂は、父を笑わせ、そしていっそう嚴重に牢屋の中で私を監視させるに役立つのみであった。

私はここでまる六ヵ月をすごした。最初のあいだは私の心にほとんど変化がなかった。マノンが私の胸のなかに現われる姿につれて、私の全感情は憎悪と愛慕、信賴と絶望のたえざる繰り返しにおわった。或る時は彼女が世の中の女たちのうちで最も愛すべきものにおもわれて、彼女に再び会いたいねがいに私はやつれるのであった。或る時は彼女がただただ卑劣な不貞な情婦としか思われず、どうにでもして探し出してひどい目に遭わせたいと誓うのであった。私は書物を貸し与えられた。それは多少私の魂に落ち着きを取り戻すに役立った。私のあらゆるなじみの作家たちを私は読み返した。私は新しい知識を得た。学問に対する限らない興味を私は再び持ったのであった。あなたはそれほどんなに役に立つかをいつかご覧になるであろう。恋のお蔭で得た知識は、以前はよくわからなかったホラーチウスやヴェルギリウスの中の多くの個所を私に悟らした。アエネーイス（Aeneas）の第四巻に私は恋愛的註釈を試みた。私はこれを公にするために保存してある。

ないことを、信じて下さい。彼女はそんなよこしまな、残酷な卑劣なことでできる女ではありません。私たち、お父さんや彼女や私を欺いているのはあのうそつきのBです。どんなに彼女が情深くて誠実であるかをもしてお父さんがご存じなら、もしあなたが彼女を知っていらっしゃるなら、お父さん自身も彼女を可愛くお思いになるでしょうに。

——お前はこどもだよ、と父は答えた。彼女についてあれほど話してあるのに、どうしてお前はこんなにまで迷いこめるのだろう。兄さんにお前を引き渡したのはあの女なのだ。お前はあれの名前までも忘れてしまわねばならん。そうして、もしお前が聡明なら、私がついているこの寛大な心をうまく利用するようにしなければなりません。父の言葉がもつともであるのは私にはつきりしすぎるほどわかっていたが、我にもあらぬ衝動がこれほど頑なに父に逆らわせるのであった。

「ああ！ と暫くだまってから私は言葉をつづけた。——あらゆる不誠実の中でも一番卑劣なやつの不仕合せな犠牲になっていることはあまりに明かです。そうです、と悲憤の涙を流しながら私は言いつづけた。——本当に私はこどもです。馬鹿正直な私などは、奴らにしてみればほとんど瞞す値打すらなかつたのでしよう。けれど自分の復讐を果すにはどうすればよいかぐらい、私は十分に心得ています。」

この両方から来る結果を比べて見た。両者の相異を発見するのは僕にはすぐだった。神さまのお救いが僕の反省を助けて下さったのだよ。僕はこの現世に対して比類のない悔蔑の情を抱いている。けれど僕をそこに引き止めるものはなんだろう。孤独の生活に走るのを妨げるものはなんだろう。君にはそれが解るだろうか、と彼は付け加えた。――

それは一に君に対する僕の感じ易い友情なのだ。君の心も、君の頭脳も実に優れたものであることを僕は知っている。君にできないような善というものは絶対にない。快楽の害毒が君の道を誤らせたのだ。美德のためになんとこの損失だろう。君がアマアンから遁走したことは僕をひどく悲しませた。あれ以来、片時だって僕は心の満足したことはなかったほどなのだ。あのため僕がいろいろと奔走したことで、それを想像してくれ給え。

彼の話によると彼は私に欺かれたこと、私が情人といっしよに出奔したことに気がつくや、馬を駆って私を追跡したが、四、五時間おくれているので、追いつくことができなかった。それでもサン・ドニに着いた時は私の出発後三十分であった。きっとパリで私をつかまえられるだろうと思つて、六週間私を探したが徒勞であった。私を見つけることができるあてのある場所にはどこへでも行つた。そうして或る日ついに彼はコメディで私の情人に出会つた。彼女は眼のさめるような身なりをしていたから、新しい情夫

世人はこれを悦ぶであろうと私は自惚れている。これを作りながら私は言ったものである。「ああ、あの貞節なティードーに必要だったのは、私のような心であったのだ。」

或る日チベルジュが私の牢獄を訪れて来た。彼が私を抱きしめてくれたその熱情に私は驚いた。同じ歳頃の若者たちの間に結ばれる、単なる学校つきあいとは別なものに思われる、そのような彼の友情のあかしを、私はいままで知らなかったのである。彼に会わずに過ぎた五、六ヶ月の間に、彼が非常に変わり、またすっかり人物が出来上っているのを見た。そのために彼の顔つきや言葉の調子までが尊敬の心を起させるほどであった。彼は学校友達としてよりはむしろ、賢明な助言者として私に語るものであった。彼は私の落ち込んだ迷いをあわれんでくれた。そうして私が痛手からいち早く回復していることを信じて悦んでくれた。最後に彼は、快楽というものの空しいことに私の眼を開かせるために、今度の過失を役立たせるがいいと勧告するのであった。

私は驚いて彼を凝視めた。——彼はそれに気がついた。

「愛するシュヴァリエよ、と彼は言った。——僕は確かに真実ではないようなことや、また慎重にかんがえて僕の確信したものでないようなことは、一言も君には言わないのだ。肉の楽しみに対しては僕だって君に劣らずに心を惹かれていたよ。けれども神さまは、同時に、美德に対する興味を僕に与えて置いて下さったのだ。僕は理性を働かして

もし私がこの決心をするようになれば、あの方が私の為にいろいろ幸福な推測を試みておいて下さったことを私はおもい出した。神に対する信仰が同時にこの私の反省に加った。私は言った。「つつしみぶかいキリスト教徒の生涯を自分は送るであろう。学問と宗教に没頭しよう。そうしたら恋のもつ危険な快楽を考えたりすることは許されなくなるだろう。凡人の願うところを自分は蔑もう。そうして、私の心はそれが尊重するものだけしか求めないことを私はよく知っているから、欲望も不安もほとんど私はもたないようになるだろう」と。

そこで、予め私は平和な隠遁の生活の骨組を作って見た。それには、小さい森と、庭のはずれを流れる穏やかな川のある、人里はなれた家がほしい。選り抜いた書物から成る書齋と、繰身堅固で、良識を具えた少数の友。消らかで、しかも簡素でつつまじやかな食卓。それに私は友人との文通も付け加えた。その友人というのはパリに住居があつて、私の好奇心を満足させるためではなく、人間の恐かな煩悶について私の気を転じさせてくれるために、世間の新事実を知らせてくれる人々である。「自分は幸福ではないだろうか、と私は付け加えた。——私の志はことごとく充されてはいないだろうか。」確かにこの計画は極度に私の趣味を欣ばせてくれた。けれど、これほど考え深い手くぱりの最後に来て、私は自分の心がなお何物かを期待しているのを感じた。世にも楽しい

いるのだと考えた。彼は女の馬車について家まで行き、召使から彼女がB氏の手当で囲われていることを教わった。

「僕はそれくらいところで断じて諦めはしなかったよ」と彼はつぶやいた。——翌日再び、彼女の口から、君がどうなったかを教えてもらいに行つたのだが、君のことを口にするのをみると、彼女は急に席をはずした。だから僕は止むを得ずほかになんの手掛りもなしに田舎へ帰つたのだ。そこで僕は君の事件と、それから彼女のために君が極度に落胆していることを知つたのだ。けれど僕はもっと落ち着いた君の姿を見ることが確かになるまでは、君に会いたくはなかったのだ。」

私は歎息した。——それでは、君はマノンに会つたのだね。ああ！君の方がよっぽど幸福だよ。僕は永久に彼女を再び見ることができないようにされているのだ。

彼はこの溜め息を、私が未だに彼女を思い切れないしと看なして数々の非難を試みるのであった。私の性格の善良さと、私の気質とについて彼は実に巧みに私を煽動したものだから、この最初の訪問以来、彼と同じようにこの世の快樂をすべて棄て去って僧籍に入りたいという激しい希望が私の心に生れてくるようになったのだ。

ただ一人でいる時は、ほかのことはもはや何一つ頭に浮ばないほど、私はこの考えを楽しく味いつづけた。前にこれと同じ勸告をして下さつたアミアンの司教様の言葉や、

進歩を示した程の勤勉さで、勉強に没頭した。そのためには夜の時間も惜しみ、昼はまた一瞬も空費しなかった。私の名声は非常に輝しいものであったから、人々は私が間違わなく頭職に就くことができると思って、私を祝福してくれたくらいであった。かつ、私の名前は、懇願することなくして、扶持簿の上に書き込まれてあった。神を信ずる心をもはや怠ることなく、私はあらゆる勤行に対して熱心であった。チベルジュはわがことのようにこれを見て欣んでくれた。そうして彼が私の改心と呼ぶものについて自ら誇り、しばしば涙を流すのを私は見たのであった。

人間の決心というものが変り易いものであることは、いままで私には珍らしいことではなかった。一つの情熱がそれを産むと、他の情熱がそれを破壊することができるのである。しかしながらサン・スルピスに私を導いた決意の神聖を、それを実践することにおいて神が私に味わせ給うた心の欣喜を考へる時、その決意を破ることができたあの容易さに私は戦慄するのである。もし天の救いというものが、いつでも情熱と等しい力を有つものであるということが真実であるならば、そんならなんという不幸な破目から人間は突然に少しの抵抗も少しの悔恨もなしに、自分の本分を遠く離れてさらわれて行くようになるだろうか。私はそれを人に聞いてもみたい。私は恋のもつさまさまの弱点から完全に解放されたと信じていた。あらゆる官能の快樂よりも、たとえそれがマノン

隠遁の生活においてこの上に何一つ望むまいとするには、マノンとともにそこを辭らねなければならぬ、ということを感じるのであった。

そういう間も、チベルジュは、私に吹き込んだこの計画のために、しばしば訪問しつづけたので、私は折を見て父にこのことを打ち明けた。父は、彼の意見として、その職業の選択は子供たちの自由に任すこと、また私が自分の身のふりかたをつけるのにどんな方法をとろうとも、彼はそれについて忠言を与えてやる権利しか保留しないであろうということを私に申し渡した。父は非常に思慮の深い助言を私に与えてくれて、その助言は自分の計画が自分で厭になるように仕向けられず、ただいっそうよく念を入れてそれを実行できるように舵を取ってくれたのであった。また新しい学校生活が近づいた。私はチベルジュと相談して、サン・スウルピスの神学校にいっしょにはいった。彼はその神学の研究を完成するために、私は自分のそれを始めるために。彼の力量人物は当区の司教に知られていたもので、彼は私たちの出発以前に司教からかなりの扶持を受けていた。

父は、私が例の情熱からすっかり醒めたものと信じていたから、容易に私を出発させてくれた。我々はパリに着いた。僧服が十字軍隊の十字章にかわり、シユヴァリエ・グリユーがアベ・デ・グリユーという名になった。私は一、二カ月の間に並外れた

出席した。そして私を思い出したことは彼女にはもちろん造作ないことであつた。

私はこの参詣をまったく知らなかつた。人も知るようにこれ等の場所には、婦人たちのために、特別の部屋があつて、そこでは細目格子の背後に彼女たちが姿を匿しているのである。私は名替に蔽われ賞讃を担つてサン・スウルピスに帰つた。夕方の六時であつた。帰るとすぐに一人の夫人が私にお眼にかかりたいということの取り次ぎを受けた。私は即座に面接所に行つた。まあ、なんとという驚くべき出現であろうか。私はそこにマノンを見たのである。それは彼女であつた。しかも今までに見たよりもいっそう愛らしくまた慈たけていた。彼女は十八歳の齡を重ねていた。その艶やかさは言語を絶してゐた。世にもたおやかに、世にも麗しく、世にも蠱惑的な、それは恋そのものの姿であつた。彼女の姿態は隅々まで私には一つの蠱惑であつた。

彼女に出會つて、私は困惑したきりであつた。なんの心からの訪れであるかを推し測ることもできずに、眼を伏せ身を慄わせて、私は彼女が口を切るのを待つのであつた。彼女の混乱も暫くは私と同じではあつたが、いつまでもだまっている私を眺めて、彼女は片手を眼に当てて涙を匿した。ためらいがちに自分の不貞が私の憎しみに値することは懺悔するけれど、もし本当に私が、彼女に少しでも優しい心を抱いていたのなら、この二年の間に彼女の身の上について、問い糺して見ようとしてくれるはずなのに、それ

によつて持ち出されても、それよりも聖アウグスチヌスの一頁を読むことを、キリスト教の瞑想の四分の一時間をもつことを、私は選んだであつたらうと私には思われた。けれど不幸な一瞬間が私を再び破滅のうちに投じたのであつた。這いだして来たと同じ深さの中に一挙に墜落した上に、新しい放埒はいつそう深く私を深淵の奥底へひきずりこんだだけ、今度の没落はいつそう取りかえしのつかないものであつたのである。

マノンの消息について聞き合すこともなくて、私は一年に近い月日をパリで過ごした。この克己は最初のあいだは私にずいぶん苦しかった。しかしながらチベルジュのいつにかわらぬ諫言と、私自身の反省が勝利を得させてくれたのであつた。最近の数ヶ月は非常に平静に過ぎたので、私はあの魅力ある不貞な女を永久に忘れてしまふ域に達している自分を信じた。

神学校において公試を受けるべき時が来た。私は名士諸氏に出席の榮を賜わらんことを懇願した。その結果私の名前はパリの全区に拡がり、ついに私の不貞な女の耳にまで届いたのである。僧名を帯びている理由から、はつきりと私とは知らなかつたのであるが、好奇心のほとほりか、またはおそらくに私を裏切つたことの悔恨か、そのいずれであるか私には決してわからなかつたが、そんなに私によく似た名前に興味を抱かせたのであつた。彼女は二、三の他の女たちとともにソルボンヌに來た。彼女は私の勤行に

この最後の言葉を私が言い切るやいなや、彼女は感激して立ち上り、私をかき抱いた。熱情のこもった無数の愛撫をもって私を圧倒した。恋がその最も激しい愛情を現わすために創り出したあらゆる名をもって彼女は私を呼んだ。私はなおも力弱くそれに答えるのみであった。実に、なんとという変りかたであろう。今まで自分が置かれていた平和な状態から、再び身を焦すわきかえる動乱へ落ちこむとは。私はそれにおどろいてしまつた。

人里離れた野原で、夜、人がするように、私は身慄いした。誰にせよ別の世界に運ばれたように考へるであろう。人はそこでは、永い間あたりを隈なく凝視めたあとでなければ安心できないような、故知らぬ恐怖に襲われるのだ。

私たちは互いに寄り添って坐つた。私は両手の中に彼女の手を捉えた。

「ああマンンよ、と私は悲しく彼女を凝視めて言った。——僕の恋が君の憎むべき裏切りで報いられるとは思ひもかけはしなかった。君がその絶対の君主である一つの心を、君によるこぼれ、服従するためにはどんな幸福をも棄てて顧みない一つの心を、欺くことは君には非常に容易なことだった。

もし君が僕のと同じくらい情け深くて素直な心をほかに見つけたかどうか、今こそ僕に話すがいい。いや、いや、自然は僕と同じ心の持ち手をよもや作りはしなかつたらう。

すらしてくれなかったのは、やっぱり非常に無情な仕打であるし、そののみか今自分の眼の前におりながら、言葉をかけようとせぜずに眺めているのは、いよいよもって冷徹なしわざであると、彼女は私をなじった。それを聴く私の心の混乱は筆にも言葉にも現わせるものではない。

彼女は坐った。私は半ば^{つか}身体を曲げ、ともに彼女と顔を合わすこともできずに、突っ立ったままであった。幾度か私は返答をしはじめるのであるが、言い切ってしまう力はなかった。やっと努力をして私は悩ましげに叫ぶのであった、「不実なマノン。ああ不実な、不実な。」

彼女は、熱い涙を流しながら、自分の不実を言い訳するようなつもりでは少しもないことを、泣いて繰り返すのであった。

「それでは貴女はどういうつもりなのか」と、なおも私は叫んだ。

——私は死ぬつもりでございませう、と彼女は答えた。——もしあなたの御心を私に返して頂けないのでしたら。それなしには私は生きては参れませぬ。

——不貞の女よ。そんなら僕のいのちを望んでおくれ、と私自身も堪^たきあえぬ涙を流して言いつづけた。——僕のいのちをとっておくれ。お前の犠牲にする僕のたった一つの残りものだ。僕の心がお前のものでなかった日は一日もなかったのだから。

のその眼にひと目見られたら、僕の心のうちにわずかの間だつてはいつていられないからだ。」

彼女の過ちはすっかり忘れてしまうことを約束しながらも、私はどんなやり方で彼女がBに誘惑されるがままになったかを知りたいと望んだ。彼女の告げたところによれば、窓ぎわにいる彼女を眺めてからBはすっかりのほせ上ったのだった。彼は司税官という触れこみで思いのたけを打ちあけて来た。つまり彼女の愛情に相応しい報酬をしようと手紙に書きつけたのである。彼女はすぐ降伏したが、しかし私たちが不自由なしに暮らすにたりる、かなりの金額を彼から引き出すよりほかにはなんのめくらみもなかったのである。彼はとてもすばらしい約束で彼女を眩惑したものだから、次第に彼女は動いて来た。けれど私は私たちの仲をさかれた前日に、彼女が示した苦惱によって彼女の良心の苛責を察してやらねばならない。Bによって豊かに囲われていたにも拘らず、彼女は彼といっしょでは一日も楽しい思いをしたことはなかった。彼女の言葉によれば、彼には私のもつこまやかな感情や、高雅なものごしがなければかりでなく、絶えず与えられる快樂のただ中においてさえ、心の奥底には私の愛の迫憶や、自分の不実についての悔恨を彼女は抱いていたからであった。彼女はチベルジュのことを、彼に訪ねられた極度の困惑を、私に語った。「心臓に剣をひと突き突き刺されてもあれほど血を動かされ

せめてこれだけでも知りたい。もし君が僕の心を棄てたあとで、なお時々は残念に思ってくれたかどうか。今日僕の心を慰めるために君を呼び戻したその好意の復活を僕はどう信じなければならぬか。君が昔よりもなおすぐれて美しいのを僕は見ておどろいているのだ。けれど君のために僕が嘗て来たあらゆる辛酸にかわって僕はたずねる！ ああ美しいマノン、これからは誠実であってくれるかどうか。」

彼女はその悔恨について非常に悲痛な数々のことを考えた。そして私をこの上もなく感動させるほど堅い誓いをもって誠実を併った。

「愛するマノンよ、と私は恋と神学の表現法とを罰あたりにもいっしょにして彼女に言った。——お前は一人の人間のためにはあまりに尊とすぎる。僕は勝ちほこった悦楽に心が浸^ひまれてゆくのを感^かじる。サン・スルピスで自由と人の言うのは、すべて一つの妄想である。お前のためには僕の幸福も名譽も棄ててしまおう。そうなることは前からよくわかつているのだ。お前の美しい眼の中に僕は自分の宿命を讀んでいる。けれどどんなにひどいことになろうともお前の愛で慰められないようなことはあるはずがない。運命の寵愛も僕の心を動かさしめない。光榮も僕には一抹の煙だ。教会の生活についての僕のもくろみはすべて愚かな妄想だった。つまり、お前とともにもちたい幸福以外のものは、ことごとく取るにたりない。なぜかというと、そんなものはどれもこれも、お前

私は同乗した。私たちは古着屋へ立ち寄った。私は再び腕章と剣をつけた。マノンが支払ってくれた。私には一文もなかったから、それにサン・スウルピスから逃亡する私に妨げがあつてはとの懸念から、彼女は私が自分の金を取りにちよつとでも部屋にひき返すことを望まなかつたからである。私の財産も取るに足りなかつたし、そんなものを軽蔑して放棄させるだけ十分に彼女はB::の贈り物で富んでいた。私たちはその古着屋にいるあいだに、今後のやり方について相談した。私のためにB::を犠牲にしたことをいよいよ値打づけるために、彼女は彼を少しも容赦しないと決心した。

「私は家具類は残して置いてやりますわ。あれはあの人のものですから、と彼女は言つた。——けれど二年越し、あの人からまき上げた宝石類や六万フランばかりのお金は持つて行きましたよ。当然ですもの。私はあの人には私のことについてなんの権力も与えてはおりません。だから私たちはパリで楽しく暮らせるような手頃の家を借りて、何もこわがることなしに住めるのですわ。」と彼女はつけ加えた。

彼女にはたとえ危険が少しもないとしても、私にはその危険の多いことを、遅かれ早かれ人目につかずに居られまいことを、かつ、既に拭い去ってしまった不幸にまたこれから絶えず曝されるであろうことを私は彼女に説き聞かせた。パリを離れるのは心残りだと彼女はかき口説いた。私は彼女を悲しませるのを非常に恐れたので、彼女の気に

はしなかったでありましょう。あの方の前では一瞬間もこらえていることができませぬので逃げてしまいました。」と彼女は言いたした。

私がパリにいること、私の境遇の変ったこと、それからソルボンヌでの私の勤行について、どんな手だてを尽して彼女が知ったかを私に語りつづけた。討論の間中胸がどきどきしたことを、涙をこらえるぐらいのことでなく、ともすれば咽び上げて来るのをおさえて声を立てまいとするために、なみなみならぬ苦しみをしたことを語った。その取り乱した姿を匿すために一番あとからあの場所を出たこと、心の動揺と、逢いたさの一念とに引きずられて、その足で神学校へと、もし私が彼女を救す気にならないように思えたら、その場で死ぬ覚悟でやって来たことを、最後に言った。

かくも熱烈な、かくも愛情に溢れた懺悔に感動しないような野蛮人がどこにあるだろう。私は、この瞬間には、マノンのためにならキリスト教界のどんな司教の位をも犠牲にしなければならぬと思った。

これからは、どんなふうにも新しくことを運ぶのがいいと思うかと私は彼女に訊ねた。一刻も早く神学校を出てもっと安全な場所に身を落ちつけるようにしなければと彼女は言った。私はいわれるままにどんな彼女の気まぐれにも同意した。往來の片隅で私を待たために彼女は馬車に乗った。それにつづいて私は、門番の気づかぬうちに逃れ去った。

あった。

「六万フランは、と私は言つて、——十年間僕たちを支えることができる。もし僕たちがシャイヨーで暮らしをつづけるなら毎年二千エキュで十分だろう。僕たちはここで相当な、けれど質素な生活をやって行こう。僕たちの費用は馬車を抱えることと芝居を見ることだけに割こう。僕たちは身を慎しもう。君はオペラが好きだから、一週に二度行こう。娯楽のためにはむだづかいがニピストールを超えないように気をつけよう。十年の歳月に僕の家庭に変化がないというようなことはあり得ない。父は老年だ。死ななにと制限らない。僕は財産をもらえるだろう。そしてその時にはすべての心配ごとから僕たちは免れるだろう。」

この用意は、もし私たちがたえずそれに従うだけ十分に賢かったなら、私の一生の中の最も愚かな行為ではなかつたはずだ。けれど私たちの決心はひと月以上とはつづかなかつた。マノンは快楽に対して熱狂的であつた。彼女のために私もまたそうであつた。つづげざまに、新しいものいりの機会が、私たちに起つた。しかも、私は彼女が時としてはむやみな使い方をするのを惜しむどころか、彼女の気に入るに違いないと信じたものはなんでも買ってやる張本人であつた。シャイヨーの私たちの住居さえ彼女には厄介になり始めた。

入るためなら、危険を冒すことは少しも辞するところではなかったが、しかし私たちは分別を出して、パリの近郊で、飲楽や必要が私たちを呼びよせたらすぐに都会に出られるような村に、家を借りることにした。私たちはあまり遠くないシャイヨーを選んだ。マノンはずぐに家にひき返し、私はチュイルリ御苑の小さい門に行つて彼女を待った。

一時間して彼女は、貸馬車に乗つて、召使いの少女を連れ、衣裳や貴重品をつめ込んだ幾つかの行李（いり）を持ってやつて来た。

私たちは時を移さずシャイヨーに着いた。一軒の家か、あるいは、居心地の良い部屋をゆつくり探すつもりで、最初の夜は宿屋に泊った。私たちは、その翌日に、二人の好みに合ったのを見つけた。

私の幸福はまず揺ぎそうもないように建て直されたと思つた。マノンは儼しきそのものであり、親切そのものであった。私には実にこまやかな心づかいをしてくれたので、あらゆる苦勞を完全すぎるまでに償（つぐな）われたことを信じた。二人とも少しばかりの経験を得ていたので、私たちの財産をしっかりと置き置くことについて頭を使った。私たちの基本財産である六万フランは永く暮して行くにたるだけの額ではなかったのである。その上、私たちはものいりを過度にひきしめるような気にはならなかった。マノンのもつ第一の美德は、私もそれに劣らないが、節儉ではなかった。私の持ち出した案はこうで

い場面と、兄の乱暴な脅迫とを、私に物語った。私は、もし彼女が涙をためて私を止めたのでなかったら、即座に復讐に飛び出したにちがいないほど、激しく腹を立てた。この事件について彼女と問答をしている間に、件の近衛兵は、断りもなしに、私たちの部屋に再びやって来た。もし私が彼を前から知っていたのなら、私はそれほど鄭重には決して迎えはしなかったであろう。しかし彼は私たちに対してにこやかに挨拶して、マノンには自身の激昂したことの謝罪に來たのだと告げる余裕を示した。彼は妹が身を持ち崩していることと信じていたので、この考えが彼を激怒させたのであった。けれど、私たちの召使たちの一人から、私の身分を聞かされて、私については非常に有難いいろいろなことを知った。そのために私たちといっしょにぜひ暮りたいと望むようになったのだと言った。私の従僕の一人から出たという、この聞き合せには何か怪しい、気に障るものがあったけれど、私は彼の挨拶を義理がたく受け入れた。私はマノンを喜ばせると信じたのだ。彼女は兄が仲直りする気になっているのを見て悦ぶ様子であった。私たちは彼を昼飯にひきとめた。彼は僅かの間にすっかり馴れ馴れしくなると、私たちがシャイヨーに帰るといふのを聞いて、どこまでもいっしょに行きたいと望んだから、彼のために馬車の中で席を一つこしらえねばならなかった。それは堂々たる占領であった。なぜなら彼はまもなく私たちに思いのままにふるまうのに慣れてしまつて、私たちの家を自

冬が近づいた。人々はことごとく都会に帰り、田園は寂しくなった。彼女はパリで再び家を借りることを申し出た。私は断然同意しなかったが、何かしらで彼女を満足させるために、家具附の部屋なら借りてもいいこと、そして一週間に数度行く集会からの帰りが遅すぎるような折には、そこで夜を過すようにしたらいいと彼女に言った。なぜならシャイヨーに非常に遅く帰ることの不便が、あすこを去りたいという彼女の口実であったから。こんなふうには、一つは都会に、一つは田園にと、二つの住居をもつたのである。この変化は、やがて私たちの没落を惹き起したところの二つの事件を生むことによつて私たちの生活をめちやめちやにしてしまった。

マノンには近衛兵の一人の兄があった。不幸にもパリで私たちと同じ町に住んでいたのである。彼はある朝、窓にいる彼女を見て妹であることを知り、さっそく私たちの家にかけてつけた。それは粗野な、礼儀知らずの男であった。彼はわめき散らしながら私たちの部屋にはいつて来た。そうして彼の妹の事情について多少は知っていたので、彼女を侮辱と非難とをもつて攻めつけたのである。私はその少し前に外出していた。彼女にしても、またそのような侮辱をどうして我慢のできぬ私にとつても、この外出はたしかに幸いであった。私は彼が立ち去つた後に家に帰つた。マノンの悲しんでいるのは何か容易ならぬことが起つたのだと私に判断させた。彼女はいま出遭つたばかりのなげな

い場面と、兄の乱暴な脅迫とを、私に物語つた。私は、もし彼女が涙をためて私を止めたのでなかつたら、即座に復讐に飛び出したにちがいないほど、激しく腹を立てた。この事件こつて彼女と問答をして、る間に、件の近衛兵は、断りもなしに、私たちの部

った。私は小さい箱に仕舞って置いた、私たちの金のことを考えて戦慄した。私は直ちにシャイヨーに引き返した。無益の焦慮であった。金庫は既に跡方もなかった。その時私は人は吝嗇家じんじやくかにあらずとも金銭を愛惜し得るものであることを感じた。この損失は世にも激しい苦痛で私の心を削り、ために私は自分の理性を失った気がした。どんな新し不幸に自分は突きつけられようとしているかを私はとっさに了解したのである。貧乏ということとは些細なことだったが、私はマノンがどんな人間であるかを知っていたのである。金のあるうちは私に忠実であり、私に惹きつけられている彼女ではあるが、落ち目になって来ると彼女を信じてはいけないことを私は既に知り過ぎる程経験していたのであった。豊饒ほうじょうと欲楽よくらくとを私のために犠牲にするためには、彼女はそれをあまりに愛しすぎていた。

「私は彼女を失うであろう、と私は叫んだ。——不幸なシュヴァリエよ、お前は前回の愛する者のすべてを再び失おうとしているのだぞ。」

この感慨は私を世にも残酷な困惑の中に投げつけた。それゆえ、暫くの間は、すべて

自分の不幸を死によって閉じるのが最上ではあるまいかと、私は思い惑うのであった。とはいえ自分にはなんの手段も残されていないかどうかを調べて見ようとするだけの思案は私にあった。神は私に一つの考えを浮ばせて、私の絶望を救った。私は、自分の損

分のものとし、私たちのものはなんでも、いわば自分の自由にしてしまったのだから。彼は私を兄弟と呼んだ。そして兄弟の心安だてからというので、彼の友達をすっかりシ

ヤイヨ一の家につれこんで、私たちの費用を彼等が負担するようになり、私達は私たちの金ですばらしい身なりをこしらえ、また負債は全部私たちに払わせるようなことさえした。マノンに厭がられないために私はこの暴虐に眼を閉じ、時々彼が彼女からかなりの金をまき上げるのを見ても見ぬふりをする程であった。大の賭博師である彼が、運の向いた時にはその一部を彼女に返却する義理固さをもっていたことは本当であるが、しかし私たちの蓄えはこんな度外れの失費に永く堪える程豊富ではなかった。私は彼のたびたびの無心から手を切るために、手厳しく彼に掛け合おうとした時、一つの災難が起ってそんな心配を無用にした。そのかわり新しい苦勞が出来てそれが私たちを一文無しに零落させてしまったのである。

或る日私たちは、よくやるように、そこで寝るためにパリに滞在していた。そういう場合にはいつも独りシヤイヨーで留守をする女中が、朝になって、その夜のうちに私たちの家から火を出して、それを消すのが非常に困難だったことを知らせてやって来た。私たちの家具が何か損害を蒙ったかと私は訊ねた。彼女の答は沢山の野次馬が救助にやってくるために、非常に混雑して、何一つ確実に護ることができなかったと言うのであ

彼等の富に与かる。つまり、彼等を誑かすのだ。また他の人たちは彼等の訓育に精を出して、彼等を教養ある人たらしむるに努力するのだ。人々がその点で成功することは事実において稀ではあるが、神の睿智の目的がそこにはないからである。彼等はその労作から彼等が教育するところの人の費用に依って生活するという、一つの収穫をあげるこゝとなるのである。かくて、富者や権力者の愚昧というものは、その取り扱いは別として、貧乏人にとって是有難い所得の素となるのである。」

これらの考えは私に多少元氣と分別とを回復させた。私は取りあえず、マノンの兄弟のレスコー君に相談に行くことに決心した。彼はパリのことならなんでも知っていた。それに私は、彼の最も明白な収入はその財産から出て来るのでもなければ、国王の給料からでもないことをいろいろな機会によって知りすぎていた。私の衣囊にはやっと二十ピストールの金が幸いにもまだ残っていた。私は彼に自分の不幸と不安を説明しながら、私の財布を示して、飢えのために死ぬのと、絶望で頭を割るのと、いずれの手段を選ぶべきかを訊いた。彼は頭を割るのは阿呆のすることであり、餓死するというのは、多くの才人たちが自分の才能を役に立てようとしないうちに、そんな破目になって来るのだということ、自分は何ができるかということをよく考えて見るのが私のなすべきことであり、私のどんな企てにでも力になり、相談相手になるから安心するようにと答えた。

失をマノンに匿して置くことは必ずしも不可能ではないであろう。そうして遭り繰りを
するか、それとも何かの僥倖ゴウベンによって、彼女に窮乏を感じさせないだけには、十分相当
に養って行けまいものではないと考えたのである。「六万フランあれば十年間は大丈夫
だろうと見積ってみたのだから、と私は自分を慰めて言うのであった。——その十年が
流れ去って、かつまた自分の望んでいるような変化が少しも家族に起らなかったとして
見ようではないか。その時どんな覚悟をするだろう。自分には十分はつきりとわからな
いけれど、その時にするであろうことを今日やって誰が妨げるだろう。自分だけの才も
なければ、また生得シヨウトクの長所もないのに、それでいながら持ち合せただけの能力で自分た
ちの食扶持シキゴウチを稼いでゆくところの、どれほど多くの人がパリに住んでいることであらう。
神の摂理は物事をまことに賢く整えてはいなかったかと、人生のさまざまな姿に思いを
回らしながら私はつけ加えるのであった。——高位高官に在る者の大部分が愚昧な人た
ちであることは、少しでも世の中を知っている者には明かなことである。けれど、その
中にこそ噴貨すべき正理があるのである。彼等にしてもし富に加うるに才智があるとし
たら、それはあまりに幸福に過ぎるであらう。そうして他の人々はあまりにも悲惨なわ
けだ。こんな人たちには辛酸と貧困から身を脱するための手段として、肉体と精神のも
つ長所が与えられているのである。あの人たちは権者に飲楽の具を供することによって、

不品行から甘い汁を吸える目当のない以上、彼女と仲直りをするつもりでは毛頭なかった。たのであると彼は白状した。いままで私たちが彼に欺かれていたことを知るのには容易であった。この話が私に与えた感情はどうであらうとも、とにかく私が彼に頼み込んでいたので、強いて笑顔を作りながら、彼の意見は最後の手段であって、万一の場合にまで取って置かなければならぬと私は答えた。それより何か他の活路を開いてくれるようにと彼に願った。彼は私の若さと、生れつきの美貌とを利用して、誰か老いて淫蕩な夫人と款を通じることを持ち出した。私はマノンに対して不実を働くことになるような、そんな方法はとでもできるものではなかった。私は自分の今の状態に一番容易で、また一番適当な方法として賭博のことを話してみた。彼の言うのには、賭博は、実際のところ、一つの手段ではある。けれどそれには手ほどきが必要だ。単に、世間並の期待でもって、賭博を企てるのは私の損失を徹底させるこの上もないやり方だ。たった一人で、助太刀もなしに、上手な奴が運を訂正するために試みる小刀細工を、正気で行おうとするのは、職業としては危険すぎる。三番目の道は賭博師仲間にはいることだ。しかし私は若いから仲間の人々がまだ結社に加わる能力が全然ないものと判断するかもしれないことを彼は惧れるのだと。そうは言ったものの彼等の傍で自分を斡旋してくれることを彼は約束した。それに、思いがけなかったことには、差し迫って必要なら幾らか用立て

「それでは非常に漠然としているよ、レスコー君、と私は言った。——僕のお願いは何よりさしあたっての切り抜けかたにあるのだ。いったいマノンに僕はどう言ったらいいと君は思うのだ？」

——マノンのことであなただは何を困っているのです、と彼はひきとった。——彼女といっしょにいることは、あなたさえその気になれば、いつでも、あなたの心配を一掃させるにたるような手段を持っていることじゃありませんか。ああいう女は、僕たち、あなたや、あいつや、それに僕なんぞを養う義務があるんですぜ。

この無礼な言葉を私が反駁しようとするのを遮って彼は、もし私が彼の意見を好しとするなら、夕方までに二人の間に分配すべき千エキュを引き受けて見せる。彼は遊蕩にかけてとても放縦な一人の貴族を知っている。彼はマノンのような女の媚を得るためにはきつと千エキュなぞ物の数にしないだろうと、言いつづけた。私は彼をきききった。

「僕は君のことをもっと信用していたのだ、と私は彼に答えた。——君が今まで僕に友情を示してくれた動機は今君が抱いているような感情とは全然反対なものだと僕は考えていたのだ。」

彼は図々しくも、いやしじゅう同じことを考えていたのだ。そしてたとえ彼女が一番愛している男のためであるにもせよ、自分の妹は一度は女の道を汚したのだから、その

り扱うであろうことは十分に確実であった。こんなに思い乱れたあげくついに、私の心を突如として安堵させた一つの考えが浮かんだのである。もっと早くそれに気がつかなかったことに私は驚いたのであった。それは友人チベルジュのもとに駆けつけることだった。この友には昔に変わらぬ熱情と友愛をいつでも見出せることを私は少しも疑わなかった。

その誠実をよく知っていて、その人に信頼することはほど嘆賞すべく、また名譽ある美德はない。人はそこにはいささかの危険をも感じないのである。よしその人々が常に懇望に応じるに至らぬとしても、確かに、我々は少くも情誼と同情をそこに汲み取るであろう。他の人々の前に在^あってはあれ程の警戒を帯びて閉じる心も、この人々の前では素直に開くのである。陽光を浴びて綻^{はな}びる一輪の花のように。そうして花はただ太陽の優しき感化をのみ待つのである。

私はこんなにも機宜を得てチベルジュを思い出したことを天の加護の結果だと思い、夜になる前に彼に会う手順を回らすことを決心した。私は彼に一言書いて、私たちの会谈に都合のいい場所を示すために、直ちに私の宿に帰った。私の用向の事情からして緘^せ黙と慎重ということが、彼の私に果してくれる最も重要な務めの一つであると申し入れた。彼に会うという希望から来る飲^たびは、マノンが私の顔の上に見のがさないであろう

いうことであつた。

私は来たときよりいっそう不満な心を抱いて彼のもとを辞し去つた。私は自分の秘密を彼に打ち明けたことを悔みさえたのであつた。彼は私のためにこれまで何一つしてくれなかつた。この打ち明け話をしたところで、得るところは同じであつたのだ。その上私は、マノンに一言もしゃべつてはくれるなという約束に、彼が背きはしまいかということをひどく恐れた。同時にまた、彼の口うらから推して、彼女を私の手から取りあげるか、そうでなくとも、もっと裕福な情人に鞍がえするように勧めるかして、彼自身の言葉に従えば、彼女を食ひものにするたくらみをもっているのではあるまいかということ、私は怖れるのに理由があつた。私はそれについてさまざまに思い思ふのであつたが、結局は自分を悩まし、朝からの絶望を新たにするのみであつた。幾度か私は父に手紙を書き、救済の金を幾らか送つてもらふために、もう一度改心したことを装おうと考へたが、父はその寛大さにも拘らず、私の最初の過失に対し六カ月も私を狭い部屋に幽閉したことをすぐ思い起した。サン・スルピスを逃げ出したために、惹き起したに相違ないそんな評判のあとであるから、父は今までよりはいっそう遙かに厳しく私を取

失や放蕩が私に対する彼の愛情を更に烈しくするのである。けれどもそれは、親しい者が墮落しようとするのを助けることもできずに眺めている人の感ずるような、世にも激しい苦悩の交ざった愛情である、と答えた。

私たちは、とあるベンチに腰を下した。

「ああ！ と、心の奥底から発する歎息をもって、私は言った。——懐しいチベルジュ、もし君の同情が僕の苦痛と同じであると言いついてくれるなら、それはなみなみならぬものに相違ない。僕の苦悩を君に打ち明けるのを僕は恥しいと思う。正直なところ、その原因はかんばしいものではないのだから。しかもその結果はというと、心を動かし、聞いてもらいたいけれど、さればとて僕を愛してくれとは言えないほど、実に悲惨きわまるものだ。」

私がサン・スルピスを出てからどんな目に遭ったかを、友達甲斐に、匿さずに話すように彼は望んだ。私はその通りにした。そうして、事実を曲げたり、自分の過失を言い訳がましくこまかしたりなぞ少しもせずに、私の情熱をもって、そうしてその情熱が自分に吹き込んだあらゆる力をもって、私は話した。それは非力なもの、落魄に興がるところの、運命独特の仕業の一つであって、それを予知することは人間の智慧には不可能なものであると同時に、それは人間の美徳からしても拒み難きものであることを説明

憂いの色を拭い去った。私はシャイヨーでの私たちの不幸を、まるで氣遣うに当らない。一些事のように彼女に話した。それにパリは彼女には世界で一番楽しい場所だから、シャイヨーで火事のちよつとした修理を施すまではパリに滞在して居る方が好都合だと私がいうのを聞いても、彼女は困りはしなかつた。一時間後に、私は指定の場所に出かけるということを約束したチベルジュの返事を得た。私は取るものもとりにあえず馳せつけた。けれど私は一目会うだけのことが自分のふしだらの苛責にもなろうという、その友人の前に現われることを愧しはづかしいと思った。しかし彼の情け深い心を知っていることとマノンのためを思う心とが、この厚かましさを支えてくれたのであった。

私はパレー・ロワイヤルの御苑内に来るように頼んで置いた。彼は私よりさきに来ていて、私の姿を見るやすぐに私を抱きに来た。彼は永いあいだ両腕に私を抱きしめていた。そうして私の顔は彼の涙で濡れるのを感じた。私は彼に顔を合わしてただ恥じ入るばかりであることを、自分の忘恩は深く心に感じていることを彼に語った。それから、私が彼に切に願う第一のことは、彼の期待と愛情を失うのが当然であることをさんざんしたあげくに、なお彼を私の友人として見てもいいかどうかを聞かしてくれることである、と言った。彼はきわめて情け深い調子で、どんなことがあっても彼にこの資格を抛棄させることはできない。私の不幸そのものが、また言うことを許されるなら、私の過

は言いついだ。——君の望むただ一つの救いを拒絶しなければならぬのか、それとも承諾することによって僕の義務を傷けねばならぬのか、なんとというジレンマに君は僕を押しつけるのだろうか。なぜなら君を今の所に踏み留まらせて置くことは、君の放蕩に手を貸すことではないだろうか。けれど、と少しばかり考えた後に彼はつぶやいた。——僕は思うのに君の場合では貧困が激しくて、おそらく最上の分別をつけるだけの余裕がないのであろう。睿智と真理を味うためには穏かな精神が必要だ。幾らかの金を作る方法を見つけよう。愛するシユヴァリエよ、と彼は私を抱きながらつけ加えた。——それにはただ一つの条件をつけることだけを許してくれ給え。それは君の住居を僕に教えてくれることと、迷惑ではあろうが君を君の徳性に戻すために少くとも僕が努力するのを許してくれることだ。君は美德を愛している。その美德から君を遠ざけるのは君の激しい情欲にすぎないことを僕は知っているんだ。」

私は真心から彼のあらゆる希望に同意した。そしてこんなにも徳の高い友人の忠言をかくも逆用せしめる、私の運命の悪性を悲しんでくれと願った。彼はすぐに私をその知りあいの両替屋の処へ連れて行った。彼の手形で、両替屋は百ピストルを渡してくれた。彼は現金を一文ももたなかったから。既に言ったように彼は金持ではなかった。彼の勤労から得る所得は千エキュであったが、彼がそれを得た最初の年であったから、ま

した。私は自分の懊惱いびつについて、懸念けんねんについて、彼に会う二時間前における自分の絶望について、また、もし友人たちによっても、運命によると同じように無情に見放された場合に、自分が落ちこんで行くであろう絶望について、血の出るような描写を試みた。ついに私は自分の苦惱を思つて悲しむ私と同じように、同情のあまり胸を痛める彼を見た程までに、善良なチベルジュの心を動かした。彼は飽かずに私を抱き、また、私が元氣を出し、心をよく慰めるように勧めてくれた。しかし、彼はいつまでも私がマノンと手を切る必要があると考えているので、私は自分が最も大きな不運と思つているのは、この別れるというそのことであり、自分の不幸全体よりもいっそう我慢のできぬ治療を受けるくらいなら、極端な困窮どころか、最も酷い死じきえも辞しないつもりでいたのだ、と私はきっぱり彼に言った。

「そんなら君の考えを言い給え、と彼は言った。——もし君が僕の提案に全部反対するのなら、僕はどんなふうにも君を助けることができなのだ。」

私の欲しいのは彼の財布なのだとは思ひ切つて言えなかつた。けれどおしまひには彼が悟ってくれた。そして私の言うことを信用はするのだがと言ひながら、決し兼ねた人の様子で、暫くは躊躇ちゆうちゆしていた。

「僕が何かと氣をまわすのは熱や友情が醒めたからと思つてくれ給うな、とやがて彼

それが無い場合には彼女の気分や心の中をまったく信用することができなかつた。彼女は私を深く愛してくれたし、また彼女も喜んでそれを承認する如く、私は彼女に恋の甘さを十分に味わすことのできる唯一人ではあるけれども、彼女の愛情が一種の不安には堪え得ないであろうことは私にはほとんど確実であつた。多少の財産に比べれば私を全地球よりも彼女は選んだでもあろう。しかしながら、彼女に捧げるものとしては渝らぬ心と眞実しか自分に残らないであろうような場合には、彼女が誰か新しいBの如き者のために私を棄て去ることにはなんの疑いもなかつたのである。そこで私は彼女の支出にいつでも応じられるように、自分ひとりの費用というものを十分に節約し、冗費を制限するといふよりも、むしろ自分に必要な多くのものを禁じることに決心した。他の何ものよりも私を脅したのは馬車であつた。なぜならうわべだけ馬と馭者を養っているように見せかけるのは不可能だつたからだ。私は自分の心配をレスコー君に打ち明けた。ある友人から百ピストルもらったことも少しも匿し立てはしなかつた。彼はもし私が一か八かを試めして見るつもりなら、彼等の仲間を饗応するために、快く百フランばかり割愛すれば、彼の紹介で結社の中に入れてもらえることは決して望みのないことではないと繰り返して言った。なんだか厭ではあつたが、残酷な必要に迫られて私はいうがままになつた。

だ一文も手をつけてはいなかったのだ、それで前借をしてくれたのであった。

私は彼の寛容の価値を知り尽して感動した。あらゆる本分を破り犯す、自分の宿命的な恋の盲目を欺くまでに。暫くの間は、美徳は、欲情に反抗して、私の心の中で成長するだけの力は十分にもっていた。そしてこの明るい時にあつては、私は少くとも自分の煩悶を恥じ卑しんでいたのだ。けれどこの闘いは力弱く、また永くはつづかなかつた。マノンに逢うと私は天より投げ落されるのかもしれない。それだから彼女の傍に戻つて来ると、これほど美わしいものに対する正当な愛情を、一瞬間にもせよ恥ずべきもののように考えた自分が不思議におもわれるのである。マノンは非凡な性格の女であつた。金銭に対して彼女ほど淡泊な女は決してなかつた。それにも拘らず金に不自由することがおそろしくて、彼女は片時も平静であることができなかった。彼女になくしてはならぬものは快樂であり遊戯であつた。もし人がなんの代価も払わずに遊び楽しむことができらるなら、彼女は一文も手にすることを望まなかつたであろう。彼女は私たちの富の源はなんであろうかを知ろうとさえしなかつた。彼女は一日を楽しく過すことができさえすればよかつたのだ。したがって、極度に娯楽に溺れたり、交奢な金の乱費に夢中になれないとしても、彼女の好みにかなつた遊び事が毎日あれば、彼女は容易に満足するのであつた。ただこんなふう^に快樂に没頭していることが彼女には何より必要であつたから、

った眼をも欺いて多数の紳士たちをさり気ない調子で無一物にしたのであった。このすばらしい技倆はめきめきと私の運を開いてくれたので、一、二週間のうちに私は仲間同志で信義上分け合う金は引き去っても、かなりの金額を手に入れたのであった。そこで私はマノンにシャイヨーでの私たちの損失を打ち明けるのをもはや恐れはしなかった。そうして、彼女を慰めるために、この不幸な報知を告げると同時に、或る家具附の家を借りてやり、そこで私たちは豊かに楽々と落ち着いたのであった。

チベルジュはこの間も、しばしば私を訪れることを怠らなかった。彼の訓戒は尽きる時がなかった。私が自分の良心に、名譽に、幸福に対して与えている損害を、彼は倦むこともなく指摘するのであった。私は彼の忠告を友情をもって迎えた。私にはそれに従うつもりはまったくなかったけれど、彼の熱情に対して、その熱情がどこから出るかを知っているがゆえに、私は感謝するのであった。時々、マノンのいる前においてすら、私は彼を楽しくからかったりした。そうして、一人の情婦と一つの僧職に附随する利益とを立派に調和させているところの、多くの司教たちや一般の坊さんたちぐらいの程度で行いますようにと、彼に勧告するのであった。

「見給え、と私は自分の女の眼を彼に指し示しながら言った。——そうしてこんなに美しい論拠によって弁護されないような過失があるかどうかを言ってくれ給え。」

レスコー君は、その夜、私を親戚の一人として紹介した。私は運命の最大の恩恵を要求しているのだから、それだけいっそう成功の可能性があるので彼はつけ加えた。けれど、私の貧乏は無一文な者のそれではないということを知らせる必要上、私は彼等を晚餐に招待する計画であると彼が連中に告げたその申し出は受けられた。私は彼等を立派にもてなした。人々は永いこと私の顔つきの上品なことや、氣だての良いことについて話し合った。或る者はまた、私のことを非常に有望だと主張した。正直そうな様子をしているから、術策を弄しても誰一人疑うものはないであろうというのである。最後に人々は私のように才能ある新人を仲間に加えてくれたことについてレスコー君に謝意を表した。そして、二、三日の内に必要な教育を私に施すことを或る一人のシユヴァリエに依頼した。

私の腕を振う主な舞台はオテル・トランシルヴァニアにきまっていた。そこには、ある広間にファラオン賭博をやる卓があり、廊下にはその他さまざまの骨牌や骰子が備えてあった。この競技場は当時クラニーに住んでいたところのR：公爵のために開かれていて、彼の従者たちの大部分が私たちの相手であった。恥を曝していうなら、私は先生の課業を瞬く間に会得したのである。取り分け、手を変えることや札を切るのに非常に熟達した。かつまた、長い袖口を大変うまく利用して、うまうまごまかし、最も慣れ切

彼は出て行くために立ち上った。私はそれをひきとめようとしたが、マノンにさええぎられた。彼女は言った。——あれは気遣いだから、勝手におかえしなさいと。

彼の言葉はさすがに私の心に或る感銘を与えずにはいかなかった。それゆえ私は、自分の心が善を指して帰ろうとするのを感じるようなさまさまの機会を認める。なぜなら、その後私の一生を通じて非常に不幸な場合に、自分の力を少しでも保ち得たのはこの思出のお蔭であるのだから。この場面が私に惹き起した悲しみさえも、マノンの愛撫は、たちまちに消し去ってしまった。私たちは歓楽と愛欲ばかりで出来た生活を送りつづけた。私たちの富の増加はお互いの愛情を高めるのであった。ヴィナスと運命の神はこれ以上に幸福な、また愛情に溢れた奴隷をもつことはなかった。神よ、なぜにこの世を禍いの巷と呼ぶのであるか、人はそこにあつてかくもすばらしい愉悦を味い得るではないか。ただ、悲しいかな、その過ぎ去ることはあまりに早い。もし快樂にして永久につづくものであるならば、人は他になんの幸福を願おうぞ。私たちの陶醉もまた同じ運命は免れなかった。喜びは束の間に去り、そうして苦い悔恨がつづいたのである。私は賭博で少からぬ金を儲けたので、その一部分をしまつて置くことを考えついた。私の召使たちは私の成功を知らないではなかった、とりわけ私の侍者とマノンの小間使の二人は。彼等の前で私たちはしばしば安心して話し合っていたのであった。この娘は可愛かった。

彼はじつところえていた。否、こらえすぎさえたのだ。けれど、私が金を儲け、それでいて彼に借りた百ピストルを返さないばかりか、新しく家を借りたり、費用を嵩ませたりして、以前よりもますますはげしく快樂に溺れて行くのを見たとき、彼は全然その調子や態度を一変した。彼は私の少しも怒りないのを歎いた。彼は私を天罰をもって威嚇した。そうしてやがて遠からず私が蒙るであろうところの禍いの一部を予言した。

「君が遊蕩に使っている金は筋の通ったものであるはずがない、と彼は私に言った。

——君は不正な手段でそれを手に入れたのだ。同じようにそれを失くしてしまうだろうよ。君にだまってそれを使うがままにさせて置くことが神さまの一ばん恐ろしい罰なのさ。僕の忠告はみんな、と彼はつけ加えた。——君には無益だった。僕の忠告がいまに君の邪魔になるのは僕にはわかり切っている。恩知らずの意志薄弱な友よ。さようなら。君の罪深い快樂が亡霊のように消えうせるように祈ろう。君の幸運も君の金も根こそぎなくなつて、君を氣違ひのように酔わせた富というものの空しさを悟るために、たったひとりぼっちで、無一物な君が残るように祈ろう。その時にこそ君を愛し、君に力を貸そうと待ち構えている僕を見出すだろう。しかし今日は、君と一切の交りを絶つ。それに君のような生活は僕は大嫌いだ。」

彼がこの使徒的訓戒を試みたのは、私の部屋で、マノンの眼の前においてであった。

「あたしたちは駄目になってしまったのね。」と彼女は眼に涙をためて言った。私は彼女を愛撫して慰めようとしたけれどそれは無駄であった。私自身も失望と落胆とに涙を流すのであった。まったく私たちは下着一枚残さない程までに、完全に落魄がくはくしたのであった。

私はすぐにレスコー君を探しにやることに決心した。彼はさっそく、警視總監とパリ大判官の家へ行くことを私にすすめた。私は行った。しかしこれはこの上もない私の災いであった。なぜなら、この奔走や、役人たちにかけて種々の手数が、なんの得るところもなかったのみならず、レスコーが彼の妹と密談して、私の留守中に怖るべき決心を彼女に吹きこむ機会を私は与えたのであったから。彼は遊蕩に金の糸目をつけぬ老漁色家のG:M:氏のことを彼女に話して、それに身を任すなら非常に利益になることを説いたものだから、私たちの不幸によって困惑している際ではあり、彼女は彼の計画にすっかり乗せられて、納得してしまったのであった。この結構な取り引きは私が帰る前に取りきめられた。そうしてレスコーがG:M:氏に予め知らせ置いていたのであったろう。その翌日に実行された。家に着くとレスコーは私を待っていたが、マノンマノンは彼女の部屋でかた臥っていた。そして召使いの口を通じて、少し休息したいから、今夜は独りで置いてくれるようにと私に願った。レスコーは彼の差し出した数ピストルを私が受け取るの

私の侍者はそれと恋仲になつてしまった。彼等はやすやすと瞞たぶらかかせそうな、若くて暢つた気な自分たちの主人に眼をつけたのであった。そこで彼等は計画をめぐらし、それを私たちに取つては実に不幸に実行したのである。その結果彼等は私たちを再びそこから決して立ち上げないような状態に置いたのであった。

或る日レスコー君に晚餐をご馳走になつて、私たちは夜中すぎに家に帰つて来た。私は侍者を、マノンには小間使を呼んだが、二人とも姿を見せない。彼等は八時から家の中に姿を見せず、その上私の命令だといつて、出がけに二、三の箱を運び出したというのであった。私はもしかすればと思つたが、部屋にはいるに及んで、疑いは遙かに予想を超えているのを見たのであった。篋たす笥の錠前は破壊されて、私の金は、着物もろともに全部盗まれてあつた。この思いがけぬ出来事に茫然としていた時、マノンは顔色を変えてやつて来て彼女の部屋でも同じように荒されていることを伝えた。異常な理性の力で辛うじて私は泣き叫ぶことを思い留まつたほど、この打撃は実に残酷であつた。自分の絶望をマノンにまでうつしてはなるまいと、私は強いて平静を装うた。冗談じやうだんのように私は言った。オテル・トランシルヴァニで、誰か間抜け者をつかまえてこの復讐じふしゆうをしてやろうよと。けれど彼女は私の不幸に非常に感じ易いように思えたから、私のつくり元気が彼女の落胆らくたんを阻とどむ以上に彼女の悲しみが私を苦しめるのであつた。

ています。それを信じていて下さい。ただ暫くのあいだ私たちの運命を整えることを許して下さい。私の毘にかかつて来るものに禍いあれですわ。私のシュヴァリエをお金持に、しあわせにするために私は働きます。あなたのマノンについての消息を、彼女が止むを得ずあなたとお別れしなければならぬために涙を流したことを、兄がお知らせに参るでしょう。」

これを読んだ時の私の心持は筆紙に尽し難いものであった。今日といえどもなお私はその時いかなる感情に動かされたかを知らないからである。それは人が決してそれと類似のものを経験することのない、あの独特な状態の一つであった。人はそれを他人に説明することはできないであろう。彼等がそれについての理窟をもたないのだから。かつまた、人は自分自身にすら十分解き明かすことに困難を覚える。なぜなら、私のこのときの感情もその性質上独自のものであるから。それは記憶の内において何物とも結びつかず、また普通の感情のどんなものにも近づけられぬからである。とまれ、私の心持がどんなものであったにしろ、そこには苦悩と怨恨と嫉妬と羞恥が混っていたことは確かである。もしその中になおいつそう、恋慕の心が混じっていないなかったら、どんなに幸いであつたらう。

「彼女は私を愛している。私はそれを信じた。私を裏切るなんて、人非人でなければ

を待って、帰って行った。私が床にはいったのはほとんど朝の四時すぎであった。それにも、なおも永いあいだ私たちの運命を建て直す手段を思いめぐらしていたから、眠りについたのは非常に遅かった。したがって目が覚めたのは十一時か正午すぎであった。私は直ぐに床を離れて、マノンの健康を訊ねに行ったが、彼女は一時間程前に、貸馬車で迎えに来た兄といっしょに余所へ出かけて行ったというのである。レスコーといっしょにこんなふうに出て行ったことは、私には不思議に思えたが、私は無理に自分の疑いを押えつけた。本を読みながら数時間を費したが、ついに不安に堪えかねて私は部屋の中を大股に歩き廻った。マノンの部屋まで来ると、彼女の机の上に封をした一通の手紙があった。彼女の手蹟で、宛名は私である。私は死ぬほど身慄いしてそれを開いた。その文句は次のようなものであった。

「私の愛するシユヴァリエよ、あなたが私の心の偶像であり、あなたを愛するよ
うに私の愛することのできるのは世の中にあなたしかないと私は信じます。けれど、お気の毒な、いとしい方よ、私たちの唯今のようなありさまでは、貞節などは馬鹿げた徳だとは思いませんか。パンに不自由しながら人は恋を語れるでしょう。飢えのために私は抑えきれぬ軽侮の心を起すかもしれません。恋の溜め息と思いが、いつか最後の吐息をつくかもしれないのです。私はあなたを心から愛し

この剣幕に彼は怖れた。そうして、私のために非常に尽力したことを報告に来たのに、私がかんなふうになんか彼をもてなすのなら、これで引きさがって、二度と足を踏み入れまいと答えた。私は彼が入念に閉じた部屋の戸口まで駆けよって、彼の方を向いて言った。

「また僕を馬鹿にして、でたらめで瞞せると思うとあてが違うぞ。さあ覚悟をしろ。でなければマノンを僕にもう一度会わせるんだ。」

——おや、おや、むやみに腹をたてたものですか、と彼はつづけた。——そのためにこそ僕が来たのじゃありませんか。あなたには思いもかけぬ幸福を持って来たのでき。それを聞いたら多分あなたは僕に感謝する気になるでしょう。

私はすぐに話をしろと迫った。

彼の話によればマノンは、貧乏の不安に堪えることができず、それに私たちの生計を一挙に建て直さねばならぬとばかり思いこんで、気前の好い人として通っているG:M氏に紹介してくれるように彼に頼んだ。彼はそんなことを勧めたのは自分であること、彼女をそこへ連れてゆくまでのいろんな方法は自分で考え出したことを、白状しようとはしなかった。

「私は今朝つれて行ったのです、と彼は言いつづけた——するとこの紳士はマノンの値打にすっかり惚れこんで、最初からその田舎の屋敷へお供したいものだと言いかけま

ばできないはずではないか、と私は叫んだ。——私が彼女の心の主人であるような権利を、何人がかつて人間の心の上に保有したことがあるか。一切を彼女のために犠牲にってしまった現在、私は彼女のために何をし残しているだろう。それなのに彼女は私を棄てるのだ。そしてこの思知らずは、私を愛することを止めないと申し出ることによつて、非難を免れ得るものと思つてゐる。飢えが恐ろしいのだ。恋の神よ、なんとという卑しい感情でしょう。高潔な私に対してなんと不似合なことをいうのでしょうか。私は飢えを恐れはしなかった。それだからこそ彼女のためになら、自分の幸福も父の家の楽しきも投げ棄てて喜んでそれに身を曝したのだ。この私は、彼女の取るに足らぬ気まぐれや、出来心を満足させるためには、必要なものまでを儉約したのだ。私を心から愛すると、彼女は言う。そのくせ、恩知らずめ、お前は誰から智慧を借りたか俺はよく知っているぞ。去りぎわに、少くとも別れの挨拶を私にして行かねばならないのだ。心から愛するものと人が別れる時、どんな苛酷な苦しみを感ずるものか、この俺に訊ねて見るがいい。進んでそれにとび込んでゆくからには、正気の沙汰ではなかつたであらう。」

私の愁訴は思いがけぬ訪問によつて遮られた。訪ねて来たのはレスコーであった。畜生！ と私は剣に手をかけて言った。——マノンはどこにゐるのだ。貴様はあれをどうしたのだ。」

せてくれとのことです。」

私は自分の運命のこの奇妙な性質について茫然と考えながら坐っていた。私は一種の感情の分裂のうちにあつた。したがってなんのことだかさっぱり訳がわからずに、レスコーがつぎからつきへとしかける沢山の質問に答えもせず、永い間じつとしていた。名誉と美德がなおも悔恨の切先きを私に感じさせ、アミアンの方へ、父の家へ、サン・スユルピスへ、また私が清浄のうちに成長したすべての場所へ、歎息とともに目を注ぐのは、かかる瞬間においてであつた。いかに広漠たる空間によって私はこの幸福な境から隔てられてはいなかつたか。私はもはや遙かにそれを望み見るのみであつた、いままなお、私の悔恨と願望を惹きつけるけれども、私の努力をそそるにはあまりに弱い影の如く。

「なんの因果から、と私はつぶやいた。——自分はこれ程までの罪を犯すのだろう。恋は淨らかな情熱であるのに、どうして私には、不幸と放埒の泉となつてしまつたのか。マノンとともに静かに正しく暮らすのを誰がさまたげたのだ。彼女の愛を少しでも得る前に、どうして私は結婚をしなかつたのか。私をあれほど愛してくれた父は、もし正當に、心から私が請い願つたら、それに賛成してくれなかつたらうか。ああ！ 父は、進んで、自分の倅の妻には立派すぎる、美しい娘として彼女を愛してくれたであつたらう

した。そこへ彼は二、三日遊びにゆくのです。僕は、とレスコーはつけ加えて、——それがあなたにどんな利益になるかをすぐに見抜いたものだからマノンの受けた損害というものはなみなみのものでないことを上手に話してきかせたのでき。そして彼の気前が好いということをむやみに煽^煽つたものだから、とうとう二百ピストルの贈り物をしようと言いましたよ。僕は、贈り物としてはそれで沢山だが妹に大変な費用のかかるのはこれからさきのことだ。それに彼女は、両親が死んでから僕等の厄介になっている弟を一人、世話してやらねばならない。で、もし彼女が気に入ったと思うのなら、彼女が自分の半身のように大切にしているこのかわいそうな子供のことで彼女を悩まさないようにしてもらいたいのだ。とそう言ったのです。これを聞いて彼は感動せずにはいられない。そこであなたとマノンのために手頃な家を一軒借りようと約束しましたよ。なぜって、このかわいそうなみなし児の弟というのはあなたのことだもの。彼はあなたのために家具も相当に用意し、毎月たっぶり四百フランの仕送りをしようと約束しました。これだけでも、よく勘定して見ると、毎年の末には四千八百フランになる。彼は、田舎を出かけてゆく前に、執事に命じて家を一軒探さして、帰るまでにそれを借りて置くように言い残して行きました。あなたはそこでマノンに会えるわけだ。彼女は僕が彼女の代りになって君を千度も接吻し、いままでよりずっとあなたを愛していると安心さ

なたのためにはすばらしい骨折なんだ。僕たちはあなたの思いもかけぬような利益をあげるから見ておいでなさい。」

私たちはG:M:M氏が、私の思いのほか背が高くて、年を取っているのを見て、兄弟だというのを怪しむかもしれないから、どんなふうにもこれを防いだものかと相談し合った。で、結局考えついた方法は、彼の前で朴訥な田舎者の様子をして、僧侶になるつもりで、そのために毎日、学校に通っているのだと思ひこませることであった。同時に初めて私が彼に挨拶する名替をゆるされるときは、とてもひどい身なりをしていることにした。G:M:M氏は三、四日して町に帰って来た。そうして執事が用意して置いた家へ、自身でマノンを案内した。彼女はすぐに自分の帰ったことをレスコーに知らせた。私は更にそれを聞いて、二人して彼女の家へ出かけて行った。この年老いたる情人は既に外出したあとだった。

マノンの意には逆らわぬつもりだったのに、彼女に会ってみれば、胸中の不平を抑えることはできなかつた。私は悲しげな、沈みきった様子をしていた。彼女に再び会った欲びも、彼女の不貞を歎く心をことごとく洗い去り得なかつたのだ。彼女は反対に私を再び見た喜びに有頂天であるらしかつた。そして私の冷淡なことを咎めた。私は敬忌とともに、彼女の非道と不貞とを口にしないわけにはゆかなかつた。彼女は最初は私の一

に。私はマノンの愛と、父の情けと、教養ある人々の尊敬と、運命のもつさまさまな善きものに美德の安靜をも加えて、どんなに幸福であつたろう。それなのに、なんとという不吉な逆運だ。なんとという穢らわしい人間になることを人は勧めに来るのだ。畜生！この俺がその仲間にはいろうというのか……けれど、もしそれを取りきめたのがマノンなら、そしてもし喜んでそれを承知しなければ彼女を失ってしまうのなら、どうしてためらうことがあるう。

「レスコー君、と私は、思えば思うほど悲しくなるさまさまの考えを遠ざけるために、眼を閉じながら叫んだ。——もしも君が僕のためを考えてやってくれたことなら、僕はお礼を言うよ、けれど君はもつと正直な方法を取ろうと思えば取れたのだ。しかしすんだことだ。そうじゃないか。もうほかのことは考えずに、君の骨折をうまく利用して計略を実行するでしょうよ。」

レスコーは、私がひどく腹を立てた後、非常に永い間、だまりこんでしまったのを見て、びくびくしていたが、彼が内心たしかに怖れていたものとは、非常に相異した私の決心を見て、すっかり喜んでしまった。この男は結局正直者とでもいうほかはないのだ。

私はそのさまさまのもつと好い証拠をつづいてお眼にかけるだろう。「そうだと、そうだと、と彼はあわてて答えた。——僕のやったのはまったくあ

の冷酷な人にこんなにひどく報いられ、こんなに無慙むざんにあしらわれて不平を言わないで
いられるだろうか。……

彼女はそれを遮って、「……まあお待ち下さい、私のシュヴァリエ、と彼女は言った。
——もう私を責めるのは無用にして下さい。あなたがおっしゃるのを聞いていますと臍
腑を突き貫かれるようです。あなたがおこっていらっしやることはわかりますわ。けれ
ど私は少しでも私たちのしあわせをよくしようとして、このことを考えついたのですか
ら、御承知下さると思っていたのです。そしてあなたに黙ってやったのも、いやな
思いをおかけしてはと遠慮してのことでした。けれど、ご賛成じゃないんですから、私
は思いきりません。」

彼女は更につけ加えて、今日はもうこれから機嫌を直してほしいと言った。彼女は既
に老人から二百ピストルの金をもらっていた。そうして老人は今晚、美しい真珠の頸
飾りやその他の宝石類、なおその上に約束の年金の半分を持って来ると約束していた。

「あの人の贈り物を受け取るまで待つて下さいな、と彼女は言った。——あの人は私
を手に入れたといって自慢することはまだどうしたってできないのです。町へ行ってか

本気をからかっていたが、いつまでも悲しげに彼女に注がれたまなざしや、自分の気分と願いにこれほどまでにうらはらなその場の空気をどうして我慢したものかと苦しんでいる私を見たとき、彼女はただひとり自分の部屋へはいつて行った。私はすぐに後を追った。彼女は泣きくずれていた。どうして泣くのだと私は訊いた。

「よくわかりじゃありませんか、と彼女は言った。——せっかく会えたのに陰気な情けなさそうな顔ばかりして、一体どうしろとおっしゃるの。ここへ来てから一時間にもなるのに、あなたは私を、トルコの王様のように勿体ぶって抱くだけで、接吻一つして下さらないんですもの。」

——おきき、マノン、と彼女に接吻して私は答えた。——僕の心が死ぬほど苦しんでいるのを君に置かすことはできないのだ。思いもかけぬ君の逃亡に僕がどんなに氣を揉こんだか、僕と寝床を別にして寝たあとで、一言の慰めもなしに僕を棄てた残酷さはどうだ。そんなことを今僕はちつとも言いはしない。君の美しい姿をみればそんなことはもうすっかり忘れてしまう。けれど君はこの家で君の希望のような情けない不幸な生活を送ることに、僕が歎かないで、涙すらこぼさないでいられると思うのか、と私は涙を流しながら言いつづけた。——僕の生れとか名替とか、そんなものは問題外だ。そんなものは僕の恋のような恋と競争し得る理由にはすこしもならない。けれどこの恋が、恩知らず

に、門口に馬車を用意して置くことを引き受けた。

夕飯の時間が来た。G：M：氏は永くは待たせなかった。レスコーは妹とともに食堂にであった。老人の最初の挨拶は彼の美しい女に、頸飾りと腕輪、それから少くとも千エキュはする真珠の下げ飾りをさし出すことであつた。それにつづいて美しいルイ金貨で、年金の半分である二千四百フランを支払つた。彼はこれらの贈り物に、昔の宮廷好みの甘つたるい言葉で風味をつけた。マノンは二、三度の接吻を拒むことはできなかった。彼女が彼の金につけたのに対して、それは彼の得た同等の権利であつた。私は入口に立つて耳をすましていた。はいれというレスコーの合図を待ちながら。

マノンが金と宝石をしまいこんだとき、レスコーは私の手を取りに来て、G：M：氏の方へ連れて行つた。そして挨拶をせよと命じた。私は最も慇懃いんけんなところを二つ三つ試みた。

「ご免下さいまし、とレスコーは言つた。——からきしまだ子供なものですから。それに、ご覧のとおり、パリ風には一向縁のない奴でして。しかし少し行儀を仕込んでやれば慣れてくることと思つております。お前はこれから何度もここで旦那にお眼にかかるとのだから、と彼は私の方を向いてつけ加えた。——こんな立派なお方をよく見習つて、

からいえば、五、六千フラン出したって多すぎることはちつともありませんわ。」

彼女の決心は五千フランの金が入る望みよりもいっそう私には気持よかった。私
は自分の心がこんなに卑しい行為から逃れ出たことを非常に満足に思っているのを見て、
名咎心というものをまだことごとくは失っていないのを知ることができた。しかし、私
は束の間の歡樂と永い苦難に生れついでいたのだった。運命が私を一つの絶壁から救う
のは、更に他のそれにつき落すために過ぎなかった。限りない愛撫をもって、彼女の気
の変わったことをいかに幸福に思うかをマノンに示したとき、私たちの方法が一致して運
べるように、レスコー君にもこのことを知らせる必要があると私は言った。

彼は初めは不平を並べたが、四、五千フランの現金が手にはいるというので喜んで私
たちの思いつきに賛成した。そこで私たちは全部G:M:氏と夕飯を共にすることに決
定した。これには二つの理由があるが、その一つは、私をマノンの弟の学生というふれ
こみで、愉快な一芝居を打とうというので、他の一つは、この淫らな老人が、予めそん
なに気前よく金を出したというのを笠に着て、マノンとふざけたりするのを邪魔するた
めであった。私たち、レスコーと自分は、老人が夜を明かすつもりの部屋に上ってゆく
時に、引き下ることにした。そしてマノンは、その後についてゆくかわりに、部屋を出
て、私といっしょに夜を過ごしに来るといふ約束であった。レスコーはちょうどその時

機会を捉えて、この老人の身の上に擬して、現にふりかかっているような凶事の物語をした。レスコー兄妹は私が露骨に老人の肖像を描いてみせたときに、とりわけはららしていた。しかし自惚れが強いので、自分のことをいわれているとは気もつかず、それに、とても上手に話を終りまで持って行ったから、一ばん最初に、どうして、なかなかおもしろいと言いだしたのは、老人であった。私がこの滑稽な場面に傍若無人であったのも道理だとあなたは思われるであろう。とうとう寝る時刻になったので、彼は恋の辛さを口にした。私たち、レスコーと私は、引き下った。老人は部屋に案内された。そしてマノンは用事を口実にして引き返した。私たちは戸口でいっしょになった。三、四軒、下の方で待っていた馬車は、私たちを迎えにやってきた。我々は瞬く間に、この町を遠ざかった。

私自身の眼からしても、この行為は明かに詐欺であったが、私の心を責めなければならぬほど、何より一ばん不正なことだとは私には思われなかった。むしろ、私には、賭博で儲けた金の方がよほど多く気になっていた。しかしながら私たちはそのどちらからもまるで益するところがなかったのである。しかも神はこの二つの不正のうち最も軽いものを最も厳格に罰すべきものとみとめたのである。

G : M : 氏は瞞されていたことをすぐに悟った。彼は私たちを見つけ出すためにその

この老いたる情人は私を見て満足であるらしかった。私の頬を二つ三つ軽くたたいて、綺麗な若者だが、パリでは若い男はすぐに放蕩しやすいから、身を慎しまねばならないと言った。レスコーは、私が生れつき大変に伶俐で、司祭さんになるんだとばかり言っているし、それに私の楽しみといえれば小さな礼拝堂をこしらえて遊ぶことだけなのだと言つて彼を安心させた。

「マノンに似ているように思う。」と老人は片手で私の頤をもちあげて、また言葉を継いだ。

私は初心な様子で答えた。「それは僕たちのからだだがびったりとくっついていてからです。それに僕は姉さんのマノンを僕の半身のように愛しているからです。」

「あれを聞いたかね、と彼はレスコーに言った。——この子はなかなか機智があるよ。こんな子供が交際社会に出ないなんて残念なことさ。」

——おお、でも、と私は言った。——僕は方々のお天主堂で沢山な人を見ています。そして僕はパリにだって僕よりずっと馬鹿な奴がきつといると思います。

——ご覧、と彼はつけ加えた。——田舎の子供にしてはなかなかすばらしい気焰じゃないか。私たちの会話は、夕食中はほとんどこんなふうであった。飄軽なマノンは何度も嘖きだしかけてもう少しで何もかも台なしにするところであった。食事の最中に私は

によつたら命をも失つていたであらうから。

私の不仕合せな情人は、私の眼の前で引きたてられ、言うも恐ろしい隠れ家へつれてゆかれたのだ。もし世の人々が、すべて私のような眼と心をもっていたら、世界で第一の玉座を占めたかもしれぬところの美しい女性にとつて、これはなんといい運命だと歎くだろう。彼女は虐待はされなかつたけれど、ただひとり、狭い牢屋におしこめられて、毎日、嘔気いけいを催すようないくらかの食物をもらうために、一定の仕事をしなければならなかつたのだ。私がこの悲しいこまごました物語を聞いたのは、ずつと後に、私自身も辛くて退屈な労役を数ヶ月間勤めていたときであつた。私をひきたてた警官たちもまたどこへ連れてゆくか一向場所をあかさなかつたから、サン・ラザールの門に来るまではどうなることか私にはわからなかつたのである。あのとき、自分の落ちこもうとしていゝ境涯よりは、私はむしろ死をえらんだであつたらうに。この建物について私はさまざまの恐ろしいことを聞かされていたのだ。中へはいつて警官たちにもう一度衣囊を調べられ、防禦の武器も手段も何一つ残っていないことを確かめられたとき、私の恐怖は更に大きくなつた。そこへ院長が現われた。彼は私の来るのを予め知らされていたのだ。彼は非常に穏かに挨拶した。

「神父さま、と私は言った。——決して軽蔑しないで下さい。そんな目に少しでも遭

夜のうちに手続きをとったかどうかは私にはわからないが、ともかく彼は大変な勢力をもっていたから永くだまされたままではいなかった。ところで私たちは軽率にもパリのひろいこと、お互いの住む地点の離れていることをあてにしすぎていたのだった。彼は私たちの住居と現在の様子を知ったばかりでなく、私は何者であるか、パリでどんな生活をしていったのか、マノンとBとの旧い関係、それに彼女のやった詐欺的行為、一言でいえば、私たちの身上話のうちで、人聞きの悪い部分をことごとく知ってしまったのだった。そこで彼は私たちを捕えて、罪人というよりも、この上もない放蕩鬼として懲らしめようと決心した。警部が六人ばかり手下をつれて私たちの部屋にはいつて来たとき私たちはまだ寝床の中にいた。彼等は第一に私たちの金、というよりG:Mの金を没収した。それから私たちを叩き起して門口まで連れて行くと、そこに二台の馬車が待っていた。その一方にかわいそうなマノンが否応なしにひっぱりこまれ、私はもう一つの方に入れられて、サン・ラザール(Saint-Lazare)に向けて拘引された。こんな不面目を経験した人ではなくてはその絶望さかげんがわからないであろう。警官どもは無情にもマノンに接吻することも、一言声をかけることも私に許してはくれなかった。私は永いあいだ彼女がどうなったかを知らずにいた。けれど最初にそれを知らずにいたことが、たしかに私にはよかったのだ。その恐ろしい成り行きを逐一承知していたら、私は意識を失うか、こと

この返事を聞いて私は、彼がいろんな経緯や、おそらくは私の名も知っているのだらうと思った。どうぞそのことを明かしてくれと願った。彼は何もかも聞かされて知っているのだとありのままに言ってくれた。

この知っているという返事は私にはあらゆる懲罰よりも痛かった。私は恐ろしい絶望のあらゆることばを放って、さめざめ泣き出した。自分を知っているすべての人々のもの笑いになり、家の名を汚すような屈辱には私は堪えることができなかつたのだ。このようにして私は、八日ばかりというものを、何ものを聞く力もなく、自分の汚辱のみを思つて、世にも深い落胆のうちに過した。マノンを思い出すことさえも私の苦しみを少しも軽くはしてくれなかつた。それはただ、この新しい悩みの以前に在^あつた二つの感情としてのみ思い起されるにすぎなかつた。私の魂を支配する情念はただ恥辱と困惑のみであつた。

人間の心のこのような特異な活動のもつ力を知る人はほとんどない。たいていの人々は五つか、六つの情念を感じるのみで、彼等の生活はその範圍内で費され、彼等の心の動揺はことごとくそこに還元されるのである。彼等から、愛と憎しみと、快樂と苦痛と、希望と危惧とを取り去つて見よ、彼等はもはやなに一つ感じないであらう。しかしながらもつと高貴な性格の人々は無数の異つた流儀によつて心を動かされ得るのである。彼

うなら僕はいつでも死んでしまいます。」

——よろしいとも、あなた、と彼は答えた。——立派にやってさえ頂ければ、私たちがお互いに満足ですよ。

院長は私に階上の部屋に来るようにと頼んだ。私は素直に彼の後にしたがった。選卒^{くわいそく}たちは戸口のところまでついて来たが、院長は私といっしょに中にはいって、彼等に引き下るように合図をした。

「それじゃ僕はあなたの囚人になったのですね、と私は言った。——ところで神父さま、僕をどうしようとおっしゃるのです。」

彼は、私に条理のわきまえのあるのを見て嬉しく思うこと、彼の義務は美德と宗教との趣味を鼓吹するのにあつて、私は彼の訓戒と忠告を普用しなければならぬこと、私が少しでも彼の配慮に應ずる気にさえなってくれば、私が一人でいても喜びを見出すばかりであろうことなどを語りきかせた。

「ああ！ 喜びを、と私は言いつづけた。——神父さん、あなたは、僕にその喜びを味わせてくれるものはたった一つしかないのをご存じなのです。」

——私は知っています、と彼は言った。——しかし私はあなたの心が入れ代らねばならぬと申すのです。

んなにも喜んで私の忠告や訓戒を受けてくれるのだろうということだ。もしもそれが悔悛というものなら、あなたは神の慈悲を示す著しい例証になります。またもしそれが生れつきの善良さから来ているのだとすると、あなたは少くともその性根がなかなか秀れていることになる。だから私は正直な節制のある生活にあなたを導くために、永くここにひきとめて置く必要があるまいという気になっています。」

彼が私をこんなふうにしていてくれるのを見て私は非常にうれしかった。で、彼をすっかり満足させるように振る舞って、いっそうその意を迎えようと決心した。私の刑期をちぢめるにはそれが一ばん確実な方法だと信じたのだ。私は本を借りたいと言った。私の選択にまかせたのであるが、私が数冊の真面目な著者を選んだのを見て彼はすっかり驚いた。私は専心勉強に身を入れていた様子をした。同時にあらゆる機会において、彼の望むような変化を示した。

しかしながら、それはうわべだけのことにすぎなかった。私は自分の恥をさらしてそれを告白しなければならぬ。私はサン・ラザールで偽善者の真似をしていたので。ただひとりいるときは、勉強するかわりに私は、ただ自分の運命をかこつばかりであった。私は牢獄を呪い、そこに自分をひきとめる専横を憎んだ。真相の不明が私をこんな目に遭わせるその圧迫に比べれば、私はむしろもう一度恋の悩みを繰り返した方が楽であっ

等は五感より以上のものをもち、その抱く思想や感覚は人間本性の一般の限界を凌駕する如くに思われる。そうして彼等は自らを俗人の上に高めているこの偉大さを感じるゆえに、それ以上には何一つ羨望しないのである。さればこそ彼等は侮蔑と嘲笑をととうてい堪え忍びがたきものとして苦しみ、羞恥というものが彼等の最も激しい情念の一つとはなるのである。

この悲しい長所を私はサン・ラザールにおいてもっていたのだ。私の悲しむありさまが院長には非常に極端に見えたので、彼はその結果を恐れて、私をこく優しく寛大に取り扱わねばならないと思った。彼は日に二、三度私をおとずれた。そしてしばしば私を誘い出して庭園を歩きまわり、熱情を傾けてさまざまな訓戒と身にしてみる忠告とを私に与えた。私はおとなしくそれを受け、感謝の心さえ表わした。それを見て彼は私の改心に望みをつないでいた。

「あなたはこんなに温良な、愛すべき気だてをもっている、と、ある日彼は言った。

——だから私はあなたが放蕩で告発されている理由がどうしてもわからない。私の腑に落ちぬことの一つは、こんなに善良な性質をさまざまに具えながら、どうして途方もない放埒に溺れることができたのだろうかということだ。その次に、私のなおいっそう不思議におもうのは、放蕩の悪習に染みきった数年を葬らしたあとで、どうしてあなたがこ

もし私がそう願うなら、彼に話してやろうと約束してくれた。私はその労をとつてくれるように切に願った。それから二日して、G:Mが私の善良なのを聞いて大変に感動し、ただに私を自由にする気になつてのみならず、私をもっと親しく知りたいたいと熱望して、牢屋まで訪ねて来るつもりでいるのだと、聞かされた。彼の顔を見るのはどうしても愉快ではなかったが、それも自分の自由への近みちとして考えた。

彼は実際にサン・ラザールへやって来た。マノンの家で見たとよりはずつとしかつめらしい、また間抜けたところのない様子をしていた。彼は私の不品行について、二、三思慮のある言葉を述べた。そして明かに自分自身の放埒を弁護するために、人間の弱さに対しては、本性の要求するある種の快楽を求めめることは許されねばならない。しかし欺瞞と恥ずべきたくらみは処罰を必要とするのだとつけ加えた。私が素直に聴いていたので彼は満足したふうであった。私とレスコー並びにマノンの兄弟関係や、例の小さい礼拝堂。これについては、私がこの敬虔な仕事をあんなに楽しみにしているのだから、サン・ラザールではずいぶん沢山こしらえたに相違ないと思つていると彼は言ったが、そんなことで彼がすこしばかり擲論したのを聞いたときさえも私は腹を立てなかつた。しかし彼にとって、そうして私自身にとつても不幸なことは、マノンもまたオピタルで礼拝堂の非常に可愛いのをきつとこしらえただろう、と思わず彼の口を洩れて出たことで

た。マノンのありかのわからぬこと、その消息の絶えていること、再びとは彼女に会えないかもしれないぬという惧れ、そんなことが私のもの思いの唯一の題目であった。私はG
：M：の腕の中にある彼女を心に描いてみた、第一にそう思ったのだから。そうして、
彼が彼女を私と同じように取り扱っているのだろうかというようなことはまったく考えも
せずに、彼が私を遠ざけたのは、ただ彼女を誰にも妨げられずに自分のものにしたか
らであると信じていた。こんなふうにして私は日を重ね、夜を重ねた。その永きは永遠
のように思われた。私は自分の偽善の成功にのみ望みをつないだ。私は院長の顔と言葉
を注意して観察しながら、彼が私のことをどういうふうに思っているかを確かめようと
した。そして私の運命を左右する人として、彼の気に入るように心がけた。私が完全に
彼の寵愛のうちにあることを知るのには造作なかった。彼が私のために尽す気になってい
るのはもはや疑いなかった。或る日大胆にも、私を釈放するのは彼の権限にあるのかど
うかを訊ねてみた。彼は全部が自分の手にあるのではないが、自分が証言すれば、G：
M：氏の依頼によって警視總監が私を幽閉したにすぎないのであるから、たぶん私を自
由にすることを承諾するだろうと思う、と言った。

「既にふた月も牢の中にいるのだから、罪は十分償われたと彼は思うだろうと、僕は
よろこんでいいのですね。」と私はうれしそうに言った。

まいがとても大変なものであったから、その場に居合せた人々は皆、その原因を知らないで、お互いに恐怖と驚愕に顔を見あわせていた。G:M:氏はその間に髪と袴飾りを直した。そして、こんなひどい目に遭ったことを怨んで、いままでよりいっそう嚴重に私を押しこめて、サン・ラザール独特のものと知られている処罰はことごとく使って私を罰するように院長に指図した。

「いいや、あなた、と院長は言った。——シュヴァリエさんのような生れの人を、そんなふうに取り扱ってはなりません。それにこの人は非常におとなしくて正直だから、なにか深い仔細でもなければこんな乱暴なことをしようとは思われません。」

この返事にG:M:氏はすっかり狼狽して、院長でも私でも、彼に刃向うような奴は誰でも、頭をさげさせてやるつもりだと言いなから出て行った。

院長は修道士たちに彼を送るように命じて、私とただ二人だけ後に残った。彼はどうしてこんな乱暴を働いたのかさっそく話してくれと私にしきりにたのんだ。

「おお神父さま、と小児のように泣きつづけながら私は言った。——いちばん酷い残忍なことを頭に浮べて下さい。野蛮と名のつくうちでいちばんいけないものを想像して下さい。それがあの破廉恥なG:M:氏が卑怯にも持ち出した行動です。おお、あいつは僕の心臓に穴をあけたのです。もう決して元通りにはならないでしょう。僕はなにもか

あった。オピタルの名に私は戦慄したが、それでも落ち着いてはつきり言ってくれらることを彼に頼む力をのこしていた。

「よろしいとも、と彼はつづけた。——二ヵ月まえから彼女はオピタル・ジェネラルで貞淑というものを教わっているのです。あなたにサン・ラザールがためになったと同じように、何か得るところがあればと望んでいますよ。」

たとえ無期徒刑に処せられようとも、或いは死が眼の前に迫ろうとも、こんな怖ろしい報知を耳にしては、私自身の憤激を制することはできなかつたであろう。私はそのために自分の力を半分もなくしたくない、そんなに激しい憤激をもって彼につかみかかった。それでも彼を地べたに投げつけるだけの、その喉をしめつけるだけの力はまだ十分のこしていた。そのとき彼の倒れる音と、辛うじて発した叫び声とを聞きつけて、院長と、数人の修道士が私の部屋に駆けつけた。そして私の手から彼を放した。私自身はほとんど力も呼吸も絶えだえであった。

「おお神よ、と私は、いく度も歎息しながら叫んだ。——神の正義よ、これほどの恥辱を受けたあとに、私は一瞬間にせよ生きていなければならぬのか。」

私はなおも、自分を殺そうとしたこの野蛮人に飛びかかりたいと思ったが、人に留められた。私の絶望、私の叫喚、そうして私の涙は、想像以上のものであった。私のふる

して、自分はいままで私の事件については、私が話したようには聞いていなかったこと、実際私が放埒な生活をしていただけのものと思っていたので、G：M：氏が、わざわざそのことに心をつかったのは私の一家を尊敬し、それと親密にしている関係からでもあるのかと思っていたこと、自分ではなにもかもこれに結びつけて解釈していたので、今の話を聞いて私の事件については大いに考えを改めよう。そして自分は警視総監に事の真相を話してみるつもりでいるから、総監はきつと私の釈放に手を貸してくれるだろうと思うと言った。つづいて彼は、私の家のものがこの監禁に全然関係がないのなら、どうして私が自分の消息を未だに家へ知らそうと思わないのかと訊いた。私はそれに答えて、父に心配をさせたくないのと、そんなことをするのは自分の恥になるからだと「言った。おわりに、彼はこの足で警視総監のところへ行ってやろうと約束してくれた。」G：M：氏は非常に不満げにここを出て行ったし、その上彼はなかなか勢力があつてこわがられているから、何かこちらの不利益になるようなことを言い出さない前に先手を打つだけのことでもしなければ。」と彼はつけ加えた。

私は神父の帰るのを、判決の時が迫っている不幸な人間がもつところのあらゆる心の懊悩を抱いて待ちかまえた。オピタルにおけるマノンを思い浮べることは私にとつては言うべからざる苦痛であつた。あすこにいることは非常に不名状であるという以外には、

G:M:氏はここを出るなり会いに行つて、あなたのことをさんざんに讒訴したので、彼はあなたをいっそう厳重に監視するために新しい命令を私に出そうとしていたところでした。」

「しかしあなたの事件の真相をお話ししたら、彼は非常に気を和げたようでした。そして老人のG:M:氏の好色を少し笑いながら、彼を満足させるため六ヵ月ばかりあなたをここに留めて置かなくてはならないと言われました。ここにいることがあなたに役に立たぬでもないなら、それはそれでまたよかろう、とそう言うのですね。それからあなたを鄭重に取り扱うようにとのことでしたが、それはわたしが保証して決してあなたの不満足にならないようにしましょう。」

この親切な院長の説明はかなり永かつたので、私には種々考えを練る時間があった。私はもし自由になりたいと焦りすぎると、いろいろな計画をだいなしにするような目に遭うだろうと思つた。そこで反対に、どうしてもここに留まっていなければならぬとしても、彼に多少でも眼をかけてもらっていることは自分には快い慰めであると言つた。それから、さりげない調子で、他人にはなんでもないことだが、自分の心を鎮めるには非常に役に立つお願いが一つあるのだ。それは、友人の一人でサン・スウルピスにいる一人の清浄な僧侶に、自分がサン・ラザールにいることを知らし、時々彼の訪問を受け

彼女はそこでどんな待遇を受けているかは私にはわからなかったが、この恐ろしいところで就いて私が耳にして来た二、三のきわだった点を思い出しては、絶えず自分の逆上を新たにするのであった。私はどんな犠牲を払っても、どんな手段を用いても彼女をせひとも助けねばならぬと決心していたから、もし他に脱出の途がなかったなら、サン・ラザールに火をつけたでもあったろう。それゆえ私は、もし警視總監が私の意に反してずっとここに引きとめて置くというようになれば、どんな手段をとるべきかに就いてさまざまに考えた。私はあらゆる試みに自分の智慧を働かせ、できそうなことはすっかり考えつくしてみたが、確実に脱走できるような自信のあることは一向にみつからなかった。その上、もし下手なことをやったら、いっそうきびしく監禁せられるのを私は惧れた。私は助力を仰げそうな二、三の友人の名を浮べてみた。けれどどうしたら彼等に私の今のありさまを知らせることができるだろうか。ついに、私はうまくゆきそうなきだ巧妙な案を考えついた。そうして院長が帰って来て、彼の奔走も得るところがなかったことがわかって、どうしてもこれを使わずにはいられなくなる時まで、なお、いっそうよく練るためにそれを延ばして置くことにした。まもなく院長は帰って来たが、その顔つきでは、吉報のありそうな愉快な様子もなかった。

「わたしは警視總監にお話ししましたが、と彼は言った。——しかし遅すぎました。

面目に懲りて私が本心にたちかえるだろうと信じたものか、すぐに私の部屋に馳せつけた。

私たちの会話は友情に溢れていた。彼は私の心境を聞きたいと言った。私は、道送の計画以外は自分の心の中をつつまずに打ち明けた。

「君の眼の前では、と私は言った。——僕は心にもない顔をしたくはないのだ。もし君がそこで、つつましい、節制のある一人の友だちを、天罰に眼をさました遊蕩児を、つまり恋を卒業した、マノンの可愛さから眼のさめた心を見つけたと思うなら、それはあまりに僕に都合よく判断しているというものだ。僕は四ヵ月前に君に見棄てられたときそのまま、相かわらず情に脆くて、そのためにいつも不仕合せだ。しかし僕は、このどうにもならない恋の中で、幸福を探していればすこしも疲れないのだ。」

彼の答えるところはこうである。私の言ったことは宥しては置けない。世の中には、悪による偽の幸福に溺れて、善による幸福よりも、その方を公然と選ぶ沢山の罪びとたちがいる。しかしながら彼等の執着するものはいずれにせよ幸福の幻影であって、彼等は外観に欺かれているのだ。けれど私の場合はどうだ。自分の執着する目的物が、ただ自分を罪に落して、不幸に導くだけの役目をするにすぎないということをよく知っているながら、それでもなお、進んで不運の中へ、罪悪の中へ、身を急がせてゆくのは、それ

ることを許してほしいことなのだと聞いた。この恩典は格別の詮議もなくて許された。話にのぼっているのはチベルジュのことなのである。私は彼から自分の釈放に必要なならぬかの助力を期待するのではなくして、ただその仕事に、彼自身すら気のつかないうちに、遠まわしに彼を道具に使用おうと思ったのであった。一言で自分の策略を述べると、私はレスコーに手紙を書いて、彼と我々の友人たちとで、自分を救い出すように骨を折ってくれんことを頼もうと思ったのだ。ところが第一の難関は彼に手紙を渡すことであつた。そうしてもちろんこれがチベルジュの役目だつたのだ。しかしながら、彼は私の情人の兄を知つていたので、こんな仕事を引き受けるのを渋るに相違なかつた。で私はレスコーに宛てた手紙を、もう一通他の手紙の中に封入し、これを知り合いのある紳士に宛てて、その手からレスコーに渡してもらおうと考えた。そうして我々のこの策略を打ち合すためにはレスコーに会う必要があるのです、彼がサン・ラザールに来て、私の兄の名前を騙り、今度の事件を調べにパリにやって来たのだと称して、私に面会を求めようように伝えた。私は彼といっしょに、最も敏速な、そして万全の策を打ち合せることにして置いた。院長はチベルジュに、私が逢つて話したがっていることを知らせた。この忠実な友はすっかり私のゆくえを見失つていたものだから、こんどの事件を知つてはいなかつた。私がサン・ラザールにいることを知つても、おそらく腹も立てずに、この不

の見方からしても、同じことだと思う。よし多少の相異があるにしても、かえって僕に有利だ。なぜなら、僕の願う幸福は手近に在るのに、君のは遠いところに在る。僕のは肉体的苦痛と同じ性質だ。つまり肉体に感じられるものなのだ。けれど君のほうのはその性質が不明で、ただ信仰によってのみ確かであるにすぎない。」

チベルジュはこの議論に眼を円くした。そしてふた足ばかり後ずさりして、おそろしく真面目な様子で、私の言うことは単に良識を傷けるのみならず、それは背教的な、無宗教的な、かなしむべき詭弁であるとして釘を打った。「なぜなら、と彼はつけ加えて、——いったい君の苦悩の結果を、宗教によって提示されるそれに比較するなどは勝手きわまる、奇怪千万の思想だ。」

——僕の思想の歪んでいるのを僕もみとめる、と私は黙らなかつた。——だが注意したまえ。僕はその思想について議論してゐるのではないんだ。僕の根づよい不幸な恋のうち、君が矛盾だと指しているものを僕は弁明するつもりなのだ。そうして僕は、たとえ矛盾があるとしても、君にしたってそのいわゆる矛盾から僕以上には逆れ出ることができまい、ということ十二分に証明したと信じる。僕がいろんなことを平等視して論じたのは単にこの意味からだ。そうして僕はいまなおそれは平等だということを主張するね。君は美德の究極は恋のそれよりも無限に上位にあると答えるかもしれない。

は思想と行為との矛盾であつて、私の理性に対する侮辱である。――

「チヘルジュ！」と私は立ちなおつて、――誰も刃向わないでいれば、君は実にやすやすと勝つてしまふね。ところで理窟を言うのは今度は僕の番だ。君は、君のいう美德による幸福には苦痛も障害も不安もないと主張することができぬかい。牢獄とか、十字架とか、刑罰や暴圧者の拷問に、君はなんとという名を与えるのか。神秘論者の言うように、肉体を苦しめることが魂の幸福だと君は言うのだろうか。まさか。それは我慢のなからぬ逆説だ。してみれば君がそんなに持ち上げる幸福の中にも無数の苦痛が混つてゐるわけだ。というより、もっと正確に言えば、それはただ不幸という糸で出来た織り物にすぎない。その不幸を通り越してはじめて幸福に行きつけるのだ。ところでもし想像を遅しうして、これらの不幸も、結局は望み通りの幸福な結果に至るのであるから、その不幸それ自体のうちよろこびがあるというだね。それならどうして君は、これと全然同じ構造なのに、僕の場合では、矛盾とか無分別とかいうのであるか。僕はマノンを愛している。僕は無数の苦難をおして、彼女の傍で幸福に、平和に暮らそうと志しているのだ。僕の歩いている道は峻しいが、自分の目的に達するという希望で心はいつも楽しいのだ。僕は一瞬間でも彼女といっしょに暮らせたら、そのためにさんざん悲しい思いをしても、十分すぎるほど報いられると信じきっている。だから、なにもかも、僕

ことだ。ほかにもっと結構なのがあると約束されても、まもなくそれが嘘であることを悟ってしまふ。そしてそのために最も見込みの確かなことも疑う気になるのである。僕を美德に引き戻そうとする説教者諸君、美德が必要欠くべからずと言うのはよろしい。だがそれは厳格で辛いものであることを匿かくきないでほしい。恋のよろこびの儂ほろいことを、それは禁断のよろこびであることを、そのうしろには永遠の処刑が尾行していることを、はつきり証明してもらいたい。恋のよろこびが楽しく快いものであればあるほど、それほど大きな犠牲を償つぐなつてくれる神はいよいよすばらしいものだということ十分に証明してもらえば、それが僕には遥かに強い感動を与えるのだ。それからまた、我々がそのよろこびを持つ心と同じような心をもって、恋のよろこびはこの世で最も完全な、最も大きな幸福であることを告白してもらいたいものだな。

私の最後の言葉はチベルジュの機嫌を直した。彼は私の思想にも多少の道理を含んでいることを認めた。ただ彼が付け加えた唯一の異議は、そんなら何故に私がわかりすぎるほどわかつている神の報償に期待して自分の恋を犠牲にし、私本来の面目に帰ろうとはしないのかという要求にはかならなかった。

「おお親しい友よ、と私は答えた。——だからこそ僕は自分が惨あはれめて懦弱よこしまだと思ふのだ。ああ！ そうだとも。僕は自分の議論とおり行動しなければならぬのだ。けれど

誰がそれに反対するものか。だが問題はそれではなからう。美德にしても、恋にしても、どちらが、より多く苦難を堪え忍ばせる力を持っているかが問題なのである。その結果から判断して見よう。世の中には厳格な美德から逃げ出す者がどれほどあるかもしれないのに、恋を遁れようとするものがいかに僅かしかないことだろう。それでも君は善の實踐に当って苦痛があるとしても、それは避くべからざる必然的なものではなく、世に十字架とか暴圧者というようなものはやなく、多数の徳の高い人々が楽しく穏かな生活を送っていると主張するだろうか。そんなら僕も同じように、恋にも平和で幸福なのがあると答えよう。そして僕の方にとって非常に有利な相異を付け加えれば、恋というものはなるほど、しばしば人を欺くけれど、少くとも恋は満足と歓喜を約束することを忘れない。それに反して宗教は人々に、悲惨な難行苦行を期待するのである。

——おどろくことはないさ、と僕はつけ加えた。彼の無念が熱情に代ろうとするのを見ながら。——僕の結論はこれだけのことだ。つまり、人に恋を厭わせようとするときに恋のよろこびを貶したり、美德を行えばいっそう大きな幸福が来ると約束したりするほど、下手な方法はないということだ。我々の性質から考えてみれば、人間の最大の幸福は確かに快樂のうちにある。僕はそうとよりほかには考えることができな。かつまた人の心が、あらゆる快樂の中で、恋のそれこそ一番たのしいと感じるのは造作のない

彼の姿を私の部屋で見たときの喜びは非常なものであった。私は注意深く扉を閉じた。「さっそくだが、と私は言った。——マノンの消息を第一に聞かせてくれないか。そしてその次に僕の鎖をはずす良い智慧を貸してくれ給え。」

彼の断言するところでは、私が投獄された前日から、彼は妹の姿を見ないのだった。そこで人に問い合せたり、いろいろと骨を折ったりした結果、彼女と私の身上を知って、二度か三度ばかりオピタルに出頭したのだが、彼女と話をする事は許されなかったのだ。

「G……M……の畜生め、と私は叫んだ。——覚えていろ！」

——あなたを助け出すことだが、とレスコーはつづけて言った。——これはあなたが考えているよりはずっとむずかしい仕事ですぜ。僕と友達二人で、昨晚この外側をすっかり調べたところ、あなたの言うようにこの部屋の窓は、建物に取り囲まれた中庭に向いているから、そこからあなたを助け出すことはとてもむずかしいということがわかったのだ。それにあなたは四階にいるのだし、ここへ縄も梯子も運ぶことはできませんよ。外部からの救助策は全然ないと僕は見ている。謀をめぐらすのはどうしても家の中からですわね。

——そうでないんだ、と僕は言った。——僕はすっかり調べたのだ。それに院長の好

僕にはその実行力があるだろうか。マノンの魔力を忘れるにはどうしたらいいのだろう。

——失礼だが、とチベルジュはつづけて、——僕はやっぱりここに我々ジャンセニストの一人がいますと思うよ。

——僕は自分で自分がわからないのだ、と私は応じた。——あらねばならぬものが、あまりはつきり僕にわからない。しかし、ジャンセニストたちの言うところが真実であることだけはわかりすぎるほどわかるのだ。

この会談は少くとも友のあわれみの情を新たにするに役立った。彼は私の放埒が悪性によるというよりは、むしろ心の弱さによることを了解した。彼の友情は、このさきききで、私を救うためにいつそう決定的なものとなった。もしそうでなかったら、私は困苦のためにきつといのちを落していたであらう。けれど私はサン・ラザールを遁れ出る計画については一言も打ち明けはしなかったのだ。私はただ手紙を引き受けてくれることだけを頼んだ。私は彼の来る前にそれを用意して置いたのだ。その上手紙を書く必要の出来たことを本当らしく見せかける口実には少しも事欠かなかった。彼は忠実にそれを届けてくれたので、レスコーはその日の内に、彼に宛てられた分を受け取った。彼は翌日私に会いにやって来た。そして私の兄という名義で都合よく関所を通った。

子をしていたので、誰一人、彼を身分のある人間と思わないものはなかった。

自分を自由にするための器具を身につけたとき、私はもはや、ほとんど自分の計略の成功を疑わなかった。それは大胆で奇怪なものであったけれど、私を力づけている動機をもってすれば、何が私に不可能であつたろう。私が部屋を出て廊下を散歩するのを許されて以来、門番が毎日夕方になると全部の扉の鍵を院長のところまで持って行ったあとで、すべての人がひっこんだことを示す深い沈黙がみなぎるのを見きわめておいて、私は、つなぎ廊下を通過して、造作なく、自分の部屋から神父の部屋へ行くことができることになつていた。私は彼からその鍵をもらうこと、もしそれを渡すのを拒んだら短銃でおどかして、それでなんとかして街路に出ようと決心したのである。私はいらいらして時の来るのを待っていた。門番はいつもの時間に、つまり九時すぎにやつて来た。私はそれからもう一時間待って、全部の修道士や下僕たちの眠つたのを確かめた。いよいよ私は、武器と灯の点つた蠟燭とを持って部屋を出た。そうしてまず、物音をたてずに起すために、神父の部屋の戸を静かに叩いた。二度目に彼はそれを聞いて、誰かが、修道士が病氣のために彼の援助を求めにきたのだと思ひながら、立って扉を開けに来た。それでもさすがに用心して扉ごしに誰がなんの用事で来たのかと訊ねた。私はやむを得ず名前を言わなければならなかったが、しかし物悲しそうな声を出して、気分がよくな

意で、禁錮を少しゆるめてもらってからはね。僕の部屋の戸はもう鍵がかからないし、それに僕は自由に修道士たちの廊下を散歩してもいいのだ。しかし階段は全部厚い戸で塞がれて、夜も昼も用心してずっと閉まっている。だからどんなに技巧を弄したって決して逃げることはできないんだ。だが少し待ちたまえ、と私は少しばかり考えたあとで、私にはすてきに思える考えを見つけて言いつづけた。——君は僕に短銃を持って来られるかしら。

——お安い御用だ、レスコーは言った。——だが誰をやつつけるつもりなのですかい。私は人を殺そうなぞというつもりでは毛頭ないんだから、短銃にも弾丸をこめて置く必要すらないよ、と言って安心させた。

「じゃあ明日それを持って来てくれ給え、と私はつけ加えた。——それから晩の十一時には間違いないしにこの家の門のあたりで、二、三人友達をつれて待っていてくれるんだよ。僕はいっしょになれると思うから。」

彼はもつとくわしく計画を教えてくれとせがんだが駄目だった。私の考えているような仕事は成功した上でなければ理窟に合っているようには見えないからと私は言った。そうして明日はいっそう容易に再び僕に会えるように、今日の訪問を早く切りあげろとすすめた。で、その次も前回同様造作なく彼は通してもらえた。彼はしかつめらしい様

しの今までの厚意の恩返しに、わたしのいのちを取ろうというのか。」

——そんな馬鹿なことが、と私は答えた。——あなたは十分に智恵もあり、理性も具えていらつしやるから、こんなものは必要ではありません。しかし私は自由になりたくて、もうすっかり覚悟をきめているのですから、もしあなたのために私の計画が失敗したら、それこそまったくあなたのせいです。

——しかし、愛する息子よ、と彼は蒼くなつて怖れながら言葉を出した。——わたしはあなたに何をしました。なんの理由があつてわたしのいのちを取ろうというのです。

——そうではありません、と私はいらいらした。——いのちがほしいとおっしゃるなら、あなたを殺そうなんて思いません。戸をあけて下さい。私はあなたの一等の友達なんです。

私は卓子クワイクンの上に鍵のあるのを見つけた。それをつかんだ。そしてできるだけ音を立てないで、後からついてくるように願つた。彼は仕方なしに決心した。私たちが歩きだして、一つの扉を開ける毎に彼は溜め息をつきながら繰り返した。

——ああ！ わたしの息子よ、ああ！ 誰がこんなことになると思つたらう。

——しずかにして下さい、神父さん、と私の方ではしじゅうこれを繰り返した。

ついに私たちは道路に面した大きな門の手前にある一種の柵のところまで来た。私は

いのだということを了解させた。

「なんだ、あなたか、わたしの愛する息子よ、と彼は扉を開いて言った。——こんなに遅く、いったいどうしてやってきたのです。」

私は部屋にはいつて、彼を戸口とは反対の隅にひっぱってゆき、もうこの上永く、サン・ラザールに留まっていることは自分には不可能なので逃げ出そうと思うのだが、人の眼につかぬためには夜が適当だし、それに彼の情誼にすがって自分のために戸口をあけてもらうか、でなければ自分で開けるために鍵を貸してもらおうかしたのだと宣言した。

この挨拶に彼は仰天したに相違なかった。しばらくは返答もせず私を凝視めたままであった。私の方はぐずぐずしていられないので、言葉をつづけて、彼のあらゆる好意には深く感動しているが、いかなる財宝よりも自由が恋しいのである。殊に自分のような不当に自由を奪われたものにはなおのことである。今夜という今夜はどんな犠牲を払ってもそれを自分のものにしようと決心したのだと言いつづけた。そうして、彼が声をあげて助けを呼んではならぬと、上衣の下に匿してあるものを見せてやった。それは沈黙をまもらせるに適切な道具である。

「短銃だね、と彼は言った。——なんとということだ。わたしの息子よ。あなたはわた

になっていることはできなかつた。私はマノンのことで死ぬほど苦しんでいたのだ。

「彼女を救い出さなけりゃ、と私は三人の仲間と言った。——ただこの目的のために僕は自由を熟望したのだ。君たちの智慧をかりて助けてやりたいのだ。僕はそのためなら命でも投げだすのだ。」

機智もあり、思慮にも欠けていなかったレスコーはこういうのである。用心して行動しなければならぬ。私がサン・ラザールを脱走したことと、出る間際のしくじりはきつと評判になっている。警視総監は私を搜索させるだろう。それに彼の威令はひろく行われてゐる。だからもし私がサン・ラザールよりいっそうひどい目に遭うのがいやなら、二、三日ほどほりをさますために、匿れてじっとしているに越したことはない。彼の忠告は賢明であつたが、それに従うには同じくらい賢明であることが必要だつた。私にはそんなにぐずついで用心している気にはどうていななかつた。で次の日は寝てくらすよと約束するところでやつと折り合つてもらつた。私は彼の部屋に閉じこもつて、夕方までじっとしていた。

その間に私はマノンを助け出すさまじまな工夫を凝らした。彼女の牢獄は私のよりも遙かに要心堅固であることは十分にわかつていた。だから暴力を用いることは問題にならなかつた。必要なのは策略だつた。しかしながら創意の女神といえども、どこから手

既に自由になった気で、神父のうしろにたっていた。そして片手には短銃を、片手には短銃を持っていた。彼が門をあげようと懸命になっている間に、近くの小さい部屋に眠っていた一人の小使が、なんだか門の音のするのを聞いて、起き上って戸口から頭を出した。正直な神父は彼なら私をつかまえることがきつとできると信じて、実に浅はかにも、自分を助けろと命令した。それは力の強い奴だったから、いきなり私にとびかかった。私も容赦はしなかった。彼の胸の真唯中に一発うち込んだ。

「ご覧なさい。あなたのせいですよ、神父さん、と私はかなり威丈高いぢたかになって私の案内者に言った。——だがこんなことでおしまいはなりません。」と私は最後の扉のところまで院長を押しやって言いたした。

院長は戸を開くの拒もうとはしなかった。私は首尾よく外へ出て、四足ほどで、約束どおり友だちを二人つれて待っていてくれたレスコーに会った。

私たちは遠ざかった。レスコーは短銃の音を聞いたように思うがと言った。「君が悪いんだよ、と私は言った。——どうして弾丸をこめてよこしたのだ。」

そうは言ったものの、私は彼が用心して置いてくれたことを彼に感謝した。さもなければ私はきつと永久にサン・ラザールに残ったのだから。私たちはある飲食店へ行って夜を過した。そこで私は三カ月に近い間の粗食を多少とり返した。けれどそこでいい気

敵意を持ったり、恋愛事件に世話をやくのを断るような馬鹿なことはいないだろう。僕は彼の同情をひいてマノンを自由な身にしようと思うのだ。もし教養もあり、涙もある青年なら、快気を出して力を貸してくれるだろう。たとえ、そんな動機から働いてくれなくとも、可愛らしい女を見れば少くとも何かはやってくれるだろう。よしそれが女に喜んでもらおうというだけの希望でもさ。僕は明日にでもさっそく会ってみるつもりだと私はつけ加えた。——僕はこれを思いついてすっかり気が楽々としたからなんだか幸先さいきがいいように思う。」

レスコー自身もこの考えにはもつともなところがあるから、そうすればいずれ、ものになるだろうと賛成してくれた。その夜は私にはいつもほど悲しくはなかった。

朝になって私は、自分のいまの貧乏では精いっぱいさっぱりとした身なりをした。それから辻馬車でT：氏の家へ行った。彼は見知らぬ人の訪問を受けて驚いた。私はその容貌と作法をみて上々吉と占った。で、率直に、思うがままを打ち明けた。そうして彼の同情をかきたてるために、自分の恋と、恋人のすぐれた点を、いずれ劣らぬこの二つのことを熱心に物語った。彼は、マノンには会ったことはないけれど、彼女の噂は、少くとも老人G：M：の情人であった彼女については、話を聞いていると言ったので、今度の事件での私の位置については全然知らないのだと思い、自分を信用してもらって、

をつけていいか知らなかったであろう。私にはまるで見当がつかなかったもので、オピタルの内部の組織について若干の知識を得てからもっとよく考えを練ることにした。

夜が来て自由の身体になると、さっそく私は、いっしょに来てくれるようにレスコーに頼んだ。私たちはものわかりそうな門番の一人に話しかけた。私はオピタル・ジェネラルと、そこで守られている秩序とについて、欲言すべき噂を聞いて来た外国人というふれこみであった。私は微細な点にわたって質問を試みた。そうしているうちにこの管理人たちのことに話が落ちたので、私は彼等の名前と家柄とを聞いた。この最後の個条についての返事を聞いたときに、私に一つの妙案が浮んで、これはすてきだとすぐ思った。時をうつつさず実行にとりかかった。私はこの計画に一つの緊要なこととして、それらの諸氏には子供があるかどうかを尋ねた。門番が言うには、確かなことは申せないが、T：氏という重だつた人の一人に、結婚前の息子があつて、何度も父親といっしょにオピタルに来たのを知っているとのことだつた。これだけはつきりさせて置けば十分だつた。私たちはそれとほとんど同時に会話を打ちきつた。家に帰るとさっそく、レスコーに私の腹案を打ち明けた。

「僕は想像するんだが、と私は言った。——T：氏の息子というのは金持で家柄が良いから同年配の青年たちのように快樂ということに何か趣味をもっているよ。彼は女に

らせたであつたらう。私はこの心持を、私もまた性質の悪い人間ではないことを納得させるようなやり方で彼に示した。私たちは心をこめて抱きあつた。そうして、私たちの心の美しいこと、情け深く親切な一人の男が、彼に似た他の男を愛しようという単なる心持、ただこれだけの理由でもって私たちは友人になつた。彼の私を大切にしてくれることは仲々これくらいではなかつたのだ。というのは、私のさまざまな冒険から推して、サン・ラザールを出たからには、不自由をしているに相違ないと考えて、彼自身の財布を取り出して、それを納めるようにと強要した。私はどうしてもそれをうけなかつた。そうして彼に言った。

「あなた、それは過分です。これほどまでもこの親切な上に、愛するマノンにもう一度会わせて下さるのですから、私は一生涯あなたを忘れません。もしあの可愛い奴を、完全に私に返して下さるなら、あなたのために私の血をことごとく流してもなおものたらぬ気が致しましょう。」

私たちはこの次に会うべき時と場所とをきめたあとで別れた。彼は親切にも、すぐその日の午後逢えるようにしてくれた。私は、とあるカフェで彼を待ち、四時すぎに来た彼といっしょに、オピタルを指して出かけた。中庭を横ぎるときに私の膝はぶるぶると慄えた。

いっそう彼の心を捉えるためにマノンと私に起ったことはすっかり細々と物語った。

「そういう訳ですから、あなた、と私は言いつづけて、——私のいのちも私の恋も、今ではあなたの手でどうにでもなるのです。私にはどちらがいつそう大切だとは言えません。私はあなたのご親切はよく存じておりますし、一つには私たちが同じ歳頃だから、同じような気持を感じて下さるかと思って、何もかも打ち明けてお話しするのです。」

彼はこの正直さと飾りのない態度とに大変感動した様子であった。彼の返事は、物のわかった、感情のこまやかな人のそれであった。そういう返事はめったにあるものではなく、また世間ではあべこべにわろく言われがちである。彼は私の訪問をまたとないめぐり合せに数え、私の友情を何より幸福な獲物だといひ、それに値するために熱心に骨を折ろうと言ってくれた。彼の勢力は大したものではなく、それに不確かでもあるからと言つて、マノンを私に返すまでの約束はしなかったが、彼女に面会させることと、彼女を再び腕の中に置くためには、力の及ぶかぎりやってみようということを申し出てくれた。私は自分の願いの全部を引き受けてくれるよりは、こんなふうには自信がないが言ってくれたのをいっそう喜んだ。私は彼の控え目な申し出のなかに、心からの親切を讀んで、非常に嬉しかった。一言でいえば、私は彼の斡旋にあらゆる希望を嘱したのだ。マノンに会わせようという約束だけですら、彼のためには私をしてなんでもする気にな

戸があげられた。私は廊下にじっとしていたけれど、彼等の会話は耳にすることができた。彼は少しばかりお慰めするつもりでやって来たので、私の友人で、私たちの幸福について非常に心をつかっている者だと言った。彼女はわくわくしながら、私の消息について何か聞けるのかとたずねた。彼は彼女の足もとに、彼女の望みどおり、優しく忠実な私を連れて来ようと約束した。

「いつ？」彼女はきいた。

「今日すぐにですよ、と彼は言った。——こんな結構な機会を遅らせてなるものですか。お望みなら今すぐにも見えますよ。」

彼女は私が戸口にいるのを知った。私はいった。彼女は喘ぐみえようにして駆けよった。三月の別れが、一分の隙もない恋人同士にかくも楽しく思わせるところの、あの溢れ出る愛情をもって、私たちは抱きあった。二人の溜め息、切れぎれの叫び声、お互いにほそほそと繰り返す限りない愛の言葉、それらは僅かの間にT…氏を心から感動させた姿であった。

「私はお二人を羨しく思います、と私たちを坐らせて彼は言った。——どんな華やかな境遇よりも私はこんなに羨しくて熱烈な婦人をほしいと思います。」

——まったくです、と私は答えた。——この女に愛してもらえる幸福が確かなら、世

「恋の力よ、と私は念じた。——それでは、あれほどの涙と不安の種であった、私の心の偶像にもう一度会えるのか。神よ、彼女の傍に行くまでは私のいのちを守って下さい。そのあとでなら私の運命も、私のいのちも、どうぞ御心のままにして下さい。私はもはやそのほかには、なんのお恵みも頂きたくはないのです。」

T…氏が二、三の門番に話しかけたら、彼等は争って同氏の意を迎えようと努めた。彼はマノンの部屋のある一郭を教えさせた。そうして私たちは恐ろしく大きな鍵——それで彼女の部屋の戸を開けるのだが——を携^つえた男に案内された。私は案内の下僕に、この男は彼女の付き添いであったから、どんなふうにも彼女はここで時を過しているのかと訊いた。彼は、あのひとは天使のように優しく、今まで冷酷なことをばを発したことがない。ここへ来た最初の六週間、絶えず涙ばかり流していたが、この頃ではずっと不幸を耐えている様子で、朝から晩まで、読書の時間以外は、縫い物に没頭している、と言った。私はなお彼女が相当に扶養されているかどうかを尋ねた。必要なことだけは決して不自由していないから安心するように、とこの男は言った。

私たちは戸口まで近づいた。私の心臓は荒々しく打ち出した。私はT…氏に言った。「あなただけおはいりになって私の訪ねて来たことのお先ぶれをなすって下さい。突然私の顔を見て感動しすぎてはいけませんから。」

ように頼んだ。この若者はその仲間たちに比べると、いくらか上等で、さまで不親切な男ではなかった。彼は私たちの会合をまのあたり見て、その惜のこもったありさまに感動していたのだ。それに、贈り物にした一枚のルイ金貨が、すっかり彼を私に結びつけてしまった。中庭へ下りたとき彼は私を物陰にひっぱって行った。

「日那樣、と彼は言った。——もし私がここを首になっても、あなたが使つて下さるか、相当の報酬を下さるなら、マノンを逃がすのは私には造作ないんですがね。」

これは耳よりな話だった。それで私は一文なしであつたけれど、彼の希望よりずっと上等の約束をした。こんな男一人ぐらいに報酬をやるのはいつだってわけではないと思つていた。

「君、安心したまえ、と私は言った。——大丈夫だよ、君のためならなんでもしてやるよ。」

しかしそのやり方はどういうのだと私は尋ねた。

「なんでもありません、と彼は言った。——夜、あの部屋の戸をあけて、通行門のところまで御案内するのです。そこであなたが待っていて受け取つて下さるだけのことです。」

私には、それにしても廊下や中庭を通るときに見つけられはしまいかという心配があ

界中の帝国でも僕は軽蔑します。

あれほど願われた会談であっただけ、それからあともずっと限りなく愛情に溢れたものであった。気の毒なマノンには彼女のいろいろな事件を、私は自分の方のことを物語った。私たちは彼女の今の状態と、私のやっと抜けだして来たそれとを語りあって、傷ましい涙をこぼした。T：氏は私たちの不幸を根絶するために熱心に骨を折ろうという新しいさまさまの約束をもって私たちを慰めてくれた。彼はこの次もいっそう容易に会えるために、この第一回の会見をあまり長びかさないようにと忠告した。私たちにそれを納得させるのは一苦労だった。とりわけマノンは私を手ばなす決心がつかなかった。彼女は幾度も私を椅子にひき戻したり、着物や手をとってひきとめたりした。

「ああ！　なんとという場所へ私をおいてきぼりになさるのです、と彼女は言った。——あなたにもう一度お眼にかかされると誰が保証してくれましょう。」

T：氏は何度も私といっしょにやって来るからと約束した。そして愉快そうにつけ加えた。

「T：氏をオピタルなぞともう呼んではいけませんよ。T：氏はヴェルサイユです。みんなの心の王様がこの中にいらっしやるのです。」

私は出がけに彼女の附添人にくらかの心づけをして、身をいれて世話をしてくれる

ちは脱走を容易にする目的で男子の服を持ちこむことにきめた。それは容易ではなかったが、私はすぐにその方法を発見した。それで、T:氏には、ただ胴衣の薄いのを二枚重ねて明日来てくれるように頼み、あとのことは全部私が引き受けた。

私たちは翌朝またオピタルにやってきた。私はマノンの分の肌衣や靴下なぞをいっしょに持って来た。上衣の上に外套を着て来たから、衣袋の脹れすぎているのがみつからずに済んだ。私たちは彼女の部屋には僅かのあいだしかなかった。T:氏は二枚の胴衣の一枚を残し、私は、外套だけで沢山だったから、上衣を与えた。彼女の服装には何一つ不足しないはずなのだが、ただ一つ半ズボンを運悪く私は忘れて来たのだ。これほど困っている場合でなかったら、こんな大事なものを忘れて来たことがきつと笑いの種になったのだが、私はこんな些細なことで計画がまる潰れになりはしまいかとすっかり絶望した。が私は覚悟をきめて、私自身半ズボンなしで出ることにした。私の外套は長かったし、それに数本の留針の力をかりて、体裁よく門を通過できるようにした。その日の残りは私には永くてたまらなかった。やっと夜になって、私たちは馬車に乗って、オピタルの門の少し上手のところに行った。まもなくマノンは案内者といっしょに姿を見せた。私たちの馬車の扉があげてあったから、二人とも一度に乗りこんだ。私は愛する恋人を両腕の中に迎えた。彼女は木の葉のように慄えた。馭者はどこへ車をつけるの

った。彼はそりや多少の危険はありますが、しかしすこしぐらいのことは思いきってやってみなけりや、と言った。私はこの男がこんなに決心しているのを見て大変嬉しかったが、ともかくT：氏を呼んでこの計画をなした。ただ一つだけの理由が、ひよっとしたらこれを危なくしそうであるとも言った。彼は私以上に危なかつた。なるほどそうすればきつと逃げることだけはできるだろうが、と言いながら、しかし、もし見つけられて、逃げぎわにつかまった暁には、と彼はつづけて、——もう永久におしまいですよ。それに、もしそういうふうに行っても、あなたがたは即座にバリを離れなけりやありません。とても匿れているわけにはゆきませんから。今度はあなたとあのかたと二人だから、搜索が二倍になりますよ。男一人なら、すぐに逃げられますが、綺麗な道づれがあるとどうしたって人目につかずにはいけませんよ。」

この理窟は私にはいかにも思われたけれど、マノンをこんなにもすぐに自由にすることができると思うと、そんなことに閉口してはいられなかった。私はこのことをT：氏に言つて、すこしばかりの不要憤や向うみずは恋に免じて恕してほしいと願つた。それに私は本当にバリを離れて、昔やったように、近くのどこかの村で足だまりをこしらえるつもりだと思つて加えた。そこで私たちは件の番人といっしょに、その計画を明日にも実行することを申し合せた。そうして力の及ぶかぎり仕事を確実にするために、私た

つでたりたくらいだった。彼女は喜びのあまり涙を流し、私は自分の顔がそれに濡れるのを感じた。しかしながら馬車を降りてレスコーの家へはいろいろとしたとき、私は駈者とまた新しく争って、その結果大変なことになったのだった。私は彼に一ルイの約束をしたことを、それが過分であるというのみならず、そんなものを支払う力がないという遙かに大きな理由によって、後悔していた。私はレスコーを呼んでもらった。彼は部屋から、門のところまで降りて来た。私は耳もとで自分の困っていることを告げた。彼は気の短い男の上に、辻馬車なんか相手にしたことはなかったものだから、そんな奴に取りあうなどと答えた。

「ルイ金貨一枚だと、とレスコーはつけ加えた。——そんな奴には鞭の二十も喰わせるがいいのだ。」

そんなことをすれば我々の身の破滅だと穏かに言ってきたが駄目だった。彼は私のステッキを奪って、駈者をひどいめに遭わさんばかりの剣幕だったので、奴は多分いままでに二、三度、近衛兵か歩兵の手にかかったことがあったのだらう。馬車もろとも、こわがって逃げてしまった。よくも瞞ごまかしたな、覚えていろと叫びながら。私は待て待てと呼んだが駄目だった。彼の逃亡は私に非常な不幸をひき起した。人に密告されることはわかりきっていた。

ですかと尋ねた。

「世界の果てだ、と私は言った。——二度とマノンに離れることのないところへ連れてゆくんだ。」

制しきれぬこの私の昂奮はもう少しのところで大変なわざわいをひきおこすところだった。馭者は私の言葉を聞いて考えたのだ。そうして、つづいて私たちを運ぶべき街の名を言ったとき、彼は何かよくない事件に関りあうのではあるまいかと答えた。彼はなお、このマノンと呼ぶ美しい青年は私がオピタルから盗んで来た女に相違ないことや、そうして自分は私に好意をもった為に、とりかえしのつかないようなことになりたくはないというようなことを言った。この悪党の勿体ぶることも結局は馬車賃をもっと高く私わせようという魂胆にすぎなかった。折れて出ないためには私たちはオピタルに近づいた。

「しつ、と私は制した。——お前にはルイ金貨一枚の儲け仕事だ。」

話がこうわかってみれば、今度はオピタルに火をつけるのも手伝いそうであった。私たちはレスコーの家に行きついた。夜も更⁺けていたのでT：氏はまた明日と約束して途中で私たちと別れた。あとは私たちと下僕だけであった。

私はマノンを両腕の中に実にしっかりと抱きしめていたから、馬車の中では座席が一

財布の中に半ピストルあるきりだった。恐怖と疲労に極度に弱ったマノンが私の傍で半ば死んだようになっていた。一方私の頭はレスコーの殺されたことではいっばいだったし、夜警の方もまだ恐れなしとは言い難かった。ああどうすればいいのだろう。シャイヨーへ家を探しに行ったとき、マノンといっしょに数日をすごしたところの、あすこのあの宿屋を運よく私は思い出した。あすこなら安全だし、それにしばらくは支払いの催促をされずに泊っていられると思ったのだ。「シャイヨーへつれて行け」と私は馭者に言った。彼はこんなに遅いんだから、一ピストルより廉やすくては行けないと断った。一難去ってまた一難だったが、やっと六フランで折れ合うことにした。私の有り金はこれで全部だった。

車を急がせながら、私はマノンを慰めていたが、本当の心はまったく絶望していた。もし私が自分の腕に、いのちをかけて縊ひりついているただ一つの宝をもたなかったら、とつきの昔に自殺していたであろう。

「自分には少くとも彼女がある、と私は思った。——彼女を愛している。彼女は私のものだ。チベルジュの言うのは嘘だ。それは幸福の幻影じゃない。自分は全宇宙が崩壊しても平気でそれを見るだろう。なぜなら、自分は他にはもはや何一つ愛さないからだ。」

「僕を台なしにしたね、と私はレスコーを怨んだ。——君の家では安心できないよ。さっそく遠くへ行かなければ。」

私はマノンに腕をかして歩かせ、我々はこの危険な街を直ちに出發した。レスコーもいっしょについてきた。神の摂理が事を運ぶやり方には実に嘆賞すべきものがある。私たちが五、六分も行かないうちに顔を包んだ一人の男が、レスコーの姿を見つけた。彼は確かに家のまわりでレスコーを探していたに相違ない、飛んでもない計画を抱きながら。そうして彼はそれを実行したのだ。

「レスコーだ、とその男は叫んで、短銃を一発放った。——こんちきしょう、今夜は天使たちと同席の夕めしだ。」

その男はすぐ姿をくらました。レスコーは倒れたまま身動きもしなかった。私は逃げるためにマノンをせきたてた、助けようにも死骸ではどうにもならなかったから。その上私はすぐにも姿をあらわしそうな夜警に捕まるのを惧れたのだ。私は彼女と下僕をつれて、最初の狭い横町に紛れこんだ。彼女は胆を潰していたから、それを元気づけるのが一苦労だった。やっと路のはずれに辻馬車が見つかったので、私たちはそれに乗りこんだ。けれど馭者が行く先はと聞いたとき、私は当惑して答につまった。私には安全な隠れ家もなければ、助けを求められるような頼みになる友人もなかった。金といつても、

「そんなら僕を何よりも、愛していてくれるのだね。」と私はきいた。

——口で言う千倍も、もっと、もっと、と彼女は言った。

——それじゃもう決して僕を離れないね。

——決して、と彼女は答えた。そうしてこの固い言葉を、本当に彼女が決して忘れないようにとは思われないほどの愛撫と誓約とをもって固めてくれた。

私は常に彼女が誠実であることを信じていた。そんな点まで猫をかぶっている理由が彼女にあるだろうか。それよりも彼女は移り気だったのだ。というよりはむしろそれ以上の何ものでもなかったのだ。そうして彼女が貧乏で困っているとき、眼の前に贅沢に暮している女を見ると、自分で自分がわからなくなるのだ。私は今までのどの証拠も及ばないような、そのことについてこの上もない証拠を握ろうとしていた。それが私のような生れと境遇の人間にはかつて湧いたこともないような世にも風がわりな事件をひき起したのだった。

彼女のこの気質を知っていた私は、翌日急いでパリに行った。彼女の兄の死と、私たち二人のために肌衣や着物を必要とすることが、十分に立派な理由になったから、別に口実を設ける必要がなかった。私は宿屋を出がけにマノンにも亭主にも、わざと、貸馬車を雇うつもりだと言ったがそれは虚勢であった。どうしても歩いてゆかねばならない

この感情は真実であった。しかしながら、私が浮世の財宝と名のつくものをこれほど軽蔑している間にも、それにしてもそういうものをこく僅かだけは必要であると感ずるのであった。なおいっそうの権威をもって残る全部を卑しむために。恋は富よりもはるかに強い。恋は財宝よりも富裕よりもはるかに強い。けれど恋はそれらの力を借りねばならないのだ。そうして心弱い恋人に取っては、そのために不本意ながらも、世界中で一ばん下等な人間の俗悪さにまで下りるほど絶望的なことはないのである。

シャイヨーに着いたのは十一時だった。私たちはなじみの客として宿屋で迎えられた。マノンが男の服装をしているのを見ても誰も驚くものはなかった。パリやその近郊では、女がいろんな服装するのに人々は馴れていたから。私は私たちの全盛時代と同じように立派に彼女をもてなさしたから、彼女は私が金に困っていようと知らなかった。私は翌日パリへ引き返して、この難儀をなんとかしようとは決心していたから、彼女には何一つ知らさないように用心していた。

食事をする彼女は蒼ざめてやつれているように思われた。オピタルでは彼女の部屋は薄暗かったから私は少しも気がつかなかったのだ。私は兄の殺されるのを見た恐怖がまだ収まらないのかと訊ねた。彼女は、あの出来事には大分心を傷めたけれど、顔色の蒼いのは三月の間も私に会わずに辛抱したからだ、きっぱり答えた。

になるとは感じないような、だらしのない人間か、もしくは心の上もなく広い、そんな恥辱にひるまないような、謙譲なキリスト教徒だけだ。ところで、私はだらしのない人間でもなければ、善良なキリスト教徒でもないから、こんな恥を避けるためなら自分のいのちの半分でも差し出したであろう。

「チベルジュは、と私はかんがえた。——あの親切なチベルジュは私に力を貸すのを拒絶するだろうか。いいや、彼は私の貧乏に心を動かしてくれるだろう。けれど例の説教で私を悩ますことだろう。その叱責や、訓戒や、威嚇を忍ばねばならないだろう。彼の救助をそんなに高く買わせるのだから、私はやっぱり、後悔や懊惱を見せるそんないやな場面に身をさらすよりは、自分のいのちの一部を差し出そう。よし、と私はつづけた。——では何もかも思い切ろう。ほかにはなんの手段もないことだから。その二つの内どちらでも一つを取るよりは自分のいのちの半分を、両方を取るよりはいのち全体を、喜んで棄てるほど、いずれとも、とても決心がつかないんだから。そうだとも、と一瞬間考えたあとでまたつづけた。——卑しい哀願に身を貶すよりは、いのち全体でもきつと喜んで私は差し出すだろう。けれどいまの問題は私のいのちではまったくないのだ。マノンのいのちと扶養が大切なのだ。彼女の恋と貞節に関係しているのだ。彼女と較べられるような何を私はもっているか。いままではそんなものは絶対になかった。

ので、私は大急ぎでクール・ラ・レーヌまで歩いた。そこで私は休むつもりだったのだ。パリでやることを予め手配したり、考えたりするためには、どうしても暫くの間、静かに、独りでいることが必要だった。

私は草の上に坐った。そうしてさまざまに思案を凝らしたが、やがて少しずつ形を取って、それは三つの重なる項目につづめられた。数えきれない程の必要事が目前に迫っているのだから、それにはまず火急な救助策が必要だった。次には少くとも未来に希望を開いてくれるような何かの方法を講じねばならなかった。最後に、これらに劣らず重大なことはマノンと私の身の安全のために、いろいろ照会をしたり、処置をしなければならぬことだった。この三つの項目をきんさんにこねまわして考えた結果、さし当って後の二つは削除してもいいと思った。シャイヨーの部屋にいれば、匿れているのに不都合ではなかったし、将来のことはまた、現在のことが満足に行ったときに考える暇があるだろうと信じた。

で、問題はさしあたって私の財布を充たすことだった。T：氏は親切に彼の金を使えと言ってくれていたが、こんなことに、自分の方からそれを頼んだりするのはどうしても私はいやだった。誰が、他人に自分の貧乏をさらけ出して、その金を分けてくれろと頼めるものか。そんなことのできるのは、下等なことをやっても、それが身を賤いやすこと

金を支払ってもらって、別れようとしたときに彼はいっしょに一廻りしてくれるようにと言った。私はマノンのことについては一言もいっていなかったから、彼は彼女が自由の身になったことを知らないでいた。したがって彼の訓戒は結局私がサン・ラザールを無謀に脱走したことに、また、そこで私の受けたありがたい教訓を私が役立てようともしず再び放埒な生活をつづけるのではないかという彼の懸念に、落ちていった。私が脱走した翌日、サン・ラザールを訪ねて、どんなふうに行われたかを聞いたとき、言葉も出ないほどに彼は驚いたそうである。そのことについて彼は院長と談合したが、この善良な神父はそのときもまだ恐怖から恢復していなかった。それにも拘らず神父は寛大にも私の脱走の経緯を警視總監に匿していた。かつ、門番の死に就いては、それが外部へ漏れることを禁じたから、その方のことは少しも心配するには及ばない。けれど、もし僅かでも聡明な感情が私に残っているなら、神が私のために下された、このありがたい機会を善用する気になるだろう。何よりも先に、父に手紙を書いて、父と和解しなければならぬ。そうしてもし私が一度でも彼の忠告に従ってくれるなら、私の家族の懐に帰るために、パリを離れてほしいと思う、と、言うのであった。

私は彼の言葉に最後まで耳を傾けた。そうして多くの点について満足した。まず私はサン・ラザールのことではなんの心配も要らなくなったことを非常に喜んだ。パリの

彼女は私にとって、光榮であり、幸福であり、富であった。なるほど、世の中には、私がかち得るためには、また避けるためには、自分のいのちでも棄てるようなものは沢山ある。けれど一つのことを自分のいのちよりも大切にするとすることは、それをマノンと同じぐらい大事にしているという理由にはならない。」

議論をここまで進めて来ると、覚悟をきめるのに手間どらなかつた。私はまずチベルジュの許へ、それからT：氏の家へ行くことを決心して歩いた。

パリの町へは行って、私は辻馬車を雇った。それに支払うだけの金はなかつたのだが、私はこれから懇願しようとする助力をあてにしていたのだ。私はルクサンブルまで走らせて、そこからチベルジュに待っていると書いて使いをやつた。彼はすぐにやつて来た。私はありのままに自分の窮迫を告げた。彼はいつか私の返した例の百ピストールで十分かと訊いた。そして一言も文句を言わずに、すぐにそれを取りにいつてくれた。愛と、まことの友情とによってはじめて理解されるところの、あの淡白な様子と、人にものを与える楽しさを示しながら。

私は自分の願いが成功するのを少しも疑つてはいなかつたが、こんなにやすやすと、つまり、私の懲りそうにないのを叱りつけようとせず、聞き届けられたのを見て驚いた。しかし、彼の叱責を全然免れていると思つたのは間違ひだつた。というのは、その

チベルジュに別れたあとの私は辻馬車を雇っても支払うことができるようになっていたけれど、大威張で、歩いてT：氏の家までゆくのを楽しみにした。私は、友人が決して心配することがないと行って保証してくれた自分の自由を、こんなふうに変験することを欣んだのだ。しかるに突如として、私は、彼の保証してくれたのは単にサン・ラザールのことだけであって、自分はなお、オピタルの一件を背負っていることに気づいた。レスコーの死は勘定に入れないとしても、そのことでも私は少くとも目撃者として関りあっていたのだ。このことを思い出すと私は極度に怖くなったので、最初に目についた路地に身を匿して、そこから辻馬車を呼ばせた。T：氏のところへまっすぐに行つて、自分の恐怖を話したら彼は笑った。私も彼の口から、オピタルの方も、レスコーの方も惧れることは少しもないんだと聞かされたとき、自分の恐怖がおかしくなった。彼のいうには、彼はマノンの奪還に自分も関係していると疑われているかもしれないと思つて、今朝オピタルに行つて、そんなことは知らぬ顔で、彼女に会いたいと申し込んだ。ところが人々は彼や私を責めるどころか、まるで反対に、この事件を奇怪な消息として、争つて彼に伝えた。そうして人々はマノンのような美しい女がどうして下男なんぞといつしよに逃げる気になったのかと不思議がつていた。そこで彼はそんなことは驚くにはあたらぬ。自由のためには人はどんなことでもやるよ。と冷淡に答えるだけで我慥した

町々は私には再び自由の土地になった。次に、私はマノンが自由の身になって、私といっしょに帰っているのを、チベルジュがすこしも知らずにいるのを見て嬉しかった。私は彼女のことについてはすっかり口を拭いていたので、少しも気にかけていないと思つたのだろう。そのことについては口をきくのさえ避ける様子であった。私は自分の家に帰るのともかくとして、せめて彼が勧めてくれたように、父には手紙を書いて、再び自分の本務に精を出し、父の意志に適うようにする心でいることを示そうと決心した。私の希望は、アカデミーで勉強するという口実の下に、父に金を送らせることであつたのだ。というのはもう一度宗門の生活に帰る意向だというようなことを、父に承服させるのはむずかしかろうと思つたのだ。そうして本當に、私は心にもないことを父に約束しようとしたのではなかつたのだ。それどころか、私は、それが私の恋と接触しない限り、何か立派な正しいことに身を入れるのを非常に喜んでいたので。私はマノンとともに暮らすかたわら、自分の勉強をやつてゆくつもりだつたのだ。それは両立しないことでは決してなかつた。このような考えにすっかり満足した私は、その日のうちに、父に手紙をさし立てることをチベルジュに約束した。彼に別れると私は本當に郵便局にはいつた。そして、それを読みかえしたとき、父の心から何かは願ち得るだろうと自惚れたほど、愛情に溢れた、従順な調子の手紙を書いた。

快諾してくれるようにと、私に願った。

私にはマノンのために肌衣や着物を調える用事しかもうなかつたので、もし彼がいっしょに、二、三軒の商店にちよつと寄つてくれてもいいなら、今すぐ出かけることができる。私は言った。私がこんなふうを持ち出したことは、それは気前のいい彼を喜ばせるつもりでいうのだと思つたのか、それとも単に美しい魂から出たのか、私にはどちらともわからなかつたが、彼はすぐに承知していっしょに出てくれて彼の邸の出入りの商人たちのところへ私を連れてゆき、私の心づもりしていたよりは、高価な布地を選ばせた。そして私がその代価を支払おうとすると、彼は断乎として一文でも私から受け取ることを商人たちに禁じた。その親切な心遣いがとても上品であつたから、私は恥しい思いをせずにおかけを蒙ることができると思つた。私たちは共にシャイヨーへの道を目指し、そこを出たときより遙かに心安らかな心持で帰着いた。

* * *

シュヴァリエ・デ・グリュエは既に一時間以上も語りつづけたので、私は少しばかり休んで、夕飯を共にしてくれるように頼んだ。私たちのこの申し出は彼に、私たちが喜んで彼の物語を傾聴したことを背かせた。そしてこれからさきの物語は更にいつそ面

そうである。彼は更に語りつづけて言うのに、彼はそこからレスコーの家へ、私と私の愛らしい恋人の姿を見ようと思つて出かけたが、馬車製造人であるその亭主は彼女をも私をも見受けはしなれないと言ひ張つた。しかしもし私たちがレスコーに会うつもりで、そこへゆくことになつていたのであるなら、私たちの姿を見せないのは少しも驚くにあたらない、なぜなら私たちは彼が殺されたことをきつと、ほとんど同時に知つたのだらうからとT：氏はいうのである。それについて亭主は今度の死の原因や事情について、知つてゐることを説明するのを拒まなかつたそうである。およそ二時間ばかり前に、レスコーの友人の、ある近衛兵が訪ねてきて彼に賭博をすすめた。レスコーは瞬く間に勝つてしまつたので、相手は一時間のうちに彼の有金の全部である百エキユをすつてしまつた。この運の悪い男は、一文なしになつたのに気がつくつと、レスコーに自分が負けた額の半分を貸してくれと頼んだ。そうしてこの折に生じた何か面倒なことで、彼等は激しく腹を立てて争つた。レスコーは外へ出て決闘しようといふのを拒絶したので、相手の男は首を叩き切つてやるから覚えていろと捨てりふをのこして出て行つた。その約束を相手はさつそく実行したのであると。T：氏は最後に親切に付け加えて、私たちのことではまったく心配してゐるから、これからもいろいろお世話をやきましようと言つてくれた。私は躊躇せず私たちの隠れ家を彼に告げた。彼は私たちと晚餐を共にしにゆきたいが

第
二
部

白く思われるだろうと彼は請け合った。夕飯がおわると、彼はまた話をつづけた。